

# オーバーロード ～百害女王～

ジェイ・デスサイズ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ギルド：アインズ・ウール・ゴウン。異形種のプレイヤー41人で作られたギルドがあった。しかし、41人というのは、サービス終了時のメンバー数の話。

一時的ではあるが、42人だった頃があった。

曰く、全ての蟲型モンスターの母である

曰く、全ての蟲型モンスターの頂点に座する存在である

曰く、種族差別無く慈悲深い存在である

そんな彼女が異世界へ渡るお話

# 目次

第1話	女王の終わり	1
第2話	女王の始まり	6
第3話	アイテムショップ“海援隊”	12
第4話	木精軍団将軍 ザミエールモン	19
第5話	ファイアの想い	26
第6話	新しい家族	34
第7話	アルシェの決断	41
第8話	女王の本心	50
第9話	女王の不安 双子の期待	56
第10話	女王と2人の後輩	62
第11話	階層守護者、集結	73
第12話	誕生【百害姫（イビルファイリア）】	82
第13話	フォーサイトの鍛錬	91
第14話	ファーストコンタクト	99
第15話	百害女王と鮮血帝1	109
第16話	百害女王と鮮血帝2	116

## 第1話 女王の終わり

DMMO—RPG、YGGDRASIL<sup>ユグドラシル</sup>

北欧神話をベースに作られた仮想空間で各々が一人の主人公として楽しめるこのゲームは他のゲームの追随を許さないくらい爆発的な人気を誇っていた。数百種類に渡る種族、2000を超ええる職業、更に各プレイヤーの技量があれば外装等が自由にカスタマイズが出来る故に、プレイヤーの数だけのキャラクターが存在しそれぞれが唯一無二の存在と成り得た、その特色は多くのユーザーを魅了しこの世界への住人の数を年々増やしていった。

“ギルド”と呼ばれる多人数推奨のグループチームも存在する。ゲーム故、イベント参加条件に【ギルド所属】があるのも珍しくない。無論、1人だけでもギルドを作ることは可能だ。

ここにも多人数推奨にも関わらず、1人でギルドを立ち上げ、色々な意味で名を揚げたプレイヤーがいた。そのプレイヤーは発売日からプレイしており、そこそこ（私生活に支障が出ない程度）課金し、ログインしない日もあったが数日程度という程、ユグドラシルにのめり込んでいた。

灰緑色のコートを身に纏い、紫色のマフラーを巻き、帽子の鍰が尖っている四角形の帽子を長い紅色の髪の上から被った女性がいる場所を目指し森の中を歩いて行く。傍から見たら美人な人間種のプレイヤーであるが——彼女は人間ではない。

<sup>ヴァーミンロードエンブレ</sup>  
蟲 女 帝、異形種と呼ばれる部類に入る蜘蛛人<sup>アラクノイド</sup>の最終種族であり、更に特定の条件をクリアしなければ進化可能にならない特殊な種族。

プレイヤー名を「ファイア」、彼女は目的の場所を目指しながら思い出に浸っていた。

「発売日から12年……長いようで、短かった。そして、とても楽しかった」

DMMO—RPG、YGGDRASIL<sup>ユグドラシル</sup>は今日この日、12年という長い歴史に終止符を打つことになる。最古参と言っても過言では

ない彼女としては心から悲しい。第2の青春でもあったそれが終わる……幕を閉じる。

「モモンガは……いや、見なくても分かる。ログインしてるわよね」

モモンガ……彼女がギルドに所属せず、フリーでPKをしていた際に声をかけてきたプレイヤーだ。彼女と同じ異形種ではあるが、彼は骸骨・アンデッド種だった。異形種のみで構成されたギルド「アイズ・ウール・ゴウン」のギルド長であり、廃課金勢である。

「まあ、あの時はモモンガの勘違いの出会いだったかね」

そう、モモンガが声をかけたのは彼女が敵プレイヤーを倒した後。つまり何も危険が無い時であったが、モモンガが見たときは丁度複数人が攻撃を仕掛けていた場面だった為慌てた感じだったのだ。

『大丈夫ですか!?!今援護を……って、あれ?』

『い、いえ……特に危険な場面は無かったと思いますが……?』

『……』

そこから話をしていき、次回の「ギルド所属者のみ」が参加条件になっているイベントに出れなくて困っている話をし、モモンガがギルドに誘ったのが「アイズ・ウール・ゴウン」に加入したきっかけだった。初めは報酬目当ての加入だったが、ノリがいいギルドメンバーなどによって離れ難い場所になっていた。彼女がこのギルドに加入して暫く経った日、ギルド全員に脱退宣言とその理由を話した。

『このギルドに入って、色々手伝っていくうちに……私も、自分のギルドを持ちたいって思った!だから、脱退を許してほしいのと、森の奥に見つけたギルドホーム系ダンジョンの攻略を、手伝ってほしい!』

初めは止めてくれていたが、彼女が本気なのが伝わり、モモンガ達は彼女の願いを受け入れ彼女の見つけたギルドホーム系ダンジョンの攻略を開始した。

そして、「アイズ・ウール・ゴウン」の協力によって手に入れたギルドホーム系ダンジョンこそ――

「私の、私だけの宝物……【メガコロニー】」

深い森の中、周囲に様々な状態異常を起こす植物が生息する場所に生える大樹。その大樹の中こそ、彼女のギルドホームである。確保し

たての頃は「アインズ・ウール・ゴウン」の面々が手伝いを名乗り出てくれた（主に制作意欲が勝るが）のだが、彼女は断り、1から10まで自分色に染めに染めまくった。結果、自分にとっての理想郷が出来上がった。

「凝り過ぎ……と言われても仕方ないわね」

彼女は新作・準新作ゲームばかりではなく、過去のゲーム、主にカードゲームが好みだった。カード一覧を眺めていた際にとあるカードを見た瞬間彼女に電流が走った。そのカードこそ、彼女の本来の姿でもある「イビルガバナ」である。他にも蟲惑魔と呼ばれるカードだったり、FGOと呼ばれるアプリゲームだったり……それらから彼女ストライクのキャラクターをNPCとして作り上げた。「アインズ・ウール・ゴウン」のメンバーを招待した際、良い意味で笑われたり色々聞かれたりした。（余談だが、「アインズ・ウール・ゴウン」のメンバーが蟲族のNPC作りに悪戦苦闘していた際、彼女の森へ行きデザイン案の相談をしている）

彼女は大樹前に立つと、首から掛けていたネックレスを出し最上階へ転移するように念じる。

でも、ここも……作り上げたこの子達も、全て……消える……

最上階へ転移し終え、玉座の間にいる彼女が凝りに凝って作り上げたキャラクター達を見やる。そこには怪人やバイオロイド、妖精などが控えている。玉座へ向かい歩きながらスクロールを操作し、フレンドリストを確認する。

「ふふ、やっぱり居た。モモンガ」

玉座に座りクス、と笑みを零す。そしてちらつと右を見る。そこには彼女が最初に作り上げたNPCがそこにいた。クワガタをモチーフに作られた怪人、「威圧怪人ダークフェイス」だ。一番最初に作った子だからか凄い時間がかかったが、そのおかげで他の怪人の際に悪戦苦闘せずに作ることができたのは良い思い出だ。なんて思い出に浸っていると、フレンドメッセージが飛んでくる。相手は予想していたが一応確認すると、やはり予想通りの人物だった。モモンガだ。

「こんばんは、モモンガ。良い夜ですね」

『こんばんは、ファイアーさん。友人の声が聞けて凄く安心してますよ、俺』

彼女の声が聞けて本当に嬉しそうなのが伝わってくる様な、色々な想いが纏った声だった。

「何故私にメッセージを？もう私は己が欲の為に脱退した部外者ですよ？」

『そういう言い方、俺怒りますよ？って言うか、欲なんて言ったらうちのギルドメンバー殆ど欲まみれじゃないですか』

「……ノーコメント」

『それに、ファイアーさんは今でもギルドメンバーですよ。ファイアーさんの旗だつて玉座の間にちゃんと飾られていますよ』

「え、なんで？」

『みんな、ファイアーさんが抜けてもギルドメンバーだつて思ってるってことですよ』

「……最終日にそういうのズルい、照れる」

『うわあ、ファイアーさんの照れ顔とか超貴重じゃないですか。見たかったなあ』

「メッセージで良かった……」

気付けばそのまま会話をし続けてしまい、気が付くとサーバーダウンまで1分を切っていた。

『ファイアーさん。今後ユグドラシル2とか出たら……また、一緒にギルドから始めませんか？』

「ふふ、それは喜んで。勘違いから始まる勧誘よりは良いですかね」

『それは言わないで下さいよ!?!』

そして互いに笑い合う。まるで悲しさを隠すかの様に……そして互いにゆつくり眼を閉じる。

『あくあ、明日は4時起きか。サーバーが落ちたら早く寝ないと、仕事に差しつかえる』

「(リストや書類仕上げとかないと……はあ)」

そして、メインサーバーが落ちる――

“  
答  
”  
だ  
っ  
た  
。



## 第2話 女王の始まり

目を閉じて終わりを待つ私はある違和感を覚えた。

いくら待ってもログアウト時に感じる一瞬の浮遊感を感じないのだ。

「ログアウトされない？運営のミスか、デマ情報だったのかな……まあ、後者なら嬉しいけどね。とりあえず、お知らせが来てないか確認しないと――」

私が確認の為に、そう。いつもの様にコンソールを操作しようとした……しかし、コンソールは現れず私の指は空を切る。

「コンソールが出ない？というか、私のこの手……げ、現実と変らない!?!――」

その真実に気付いた瞬間、全身に恐怖が包む。これではまるで大昔の小説みたいではないか……まさか、このユグドラシルはデスゲームと化してしまったのか。伸ばしていた右手開いては閉じて感触を確かめ、顔に手を宛て、表情筋の動きを確かめる。

「手だけじゃなく、顔も……そ、そんなバカな!?!――」

大昔の小説によればデスゲームはボスを倒さなければゲームから解放されない。そしてユグドラシルでボスといえば異形種であり、その中でも適任なのは上位に位置する私のようなプレイヤーだ。いくらデバフ特化の私でも大勢のプレイヤーを相手にするのは不可能だ。ストライドシエネレーション

時空超越したとしても――

「陛下っ！いかがなさいましたか！陛下っ!！」

私が最悪の状態の可能性ばかり考えていると、外部からの大声によって現実を引き戻された。

「だ、ダークフェイス……?！」

「その通りですっ！女王陛下によって最初に生み出された存在であり、メガコロニー最強の戦士で御座います!！」

私に声をかけてきたのは、NPCであるダークフェイス。

「……え?ダークフェイスが動いて、私と言葉を交わしている?」

まるで「生きている」かの様に。視線をダークフェイスから少しズラすと私が造り上げた子達が不安そうな顔をして私を見つめている。今の状況を色々確認したいけど、今は此処の子達を落ち着かせないで。

—《女帝のオーラI》—

《女帝のオーラ》、このスキルは調べた限りでは私しか獲得していないスキル。獲得するには私と同じ存在になるしかない…。しかし、女性が好きで蟲族を選ぶとは考えにくく使い手が私しか居ないのも頷ける。このオーラは、味方には安心感を与え、不安定な精神状態を解除する、敵には畏怖・恐怖・絶望などを与える。そして私はできるだけ優しく、泣きそうな赤ん坊をあやすように言った。

「妾は大丈夫だ、心配をかけたな。妾の愛おしい子供達よ」

優しく微笑むと、ダークフェイスや私を心配していた子達から安堵の表情が伺える。それを確認し、私は立ち上がり眼を閉じる。

—スキルの発動には問題はない、という事は私が本来の姿になるには—

以前は浮かび上がるアイコンをクリックすれば良かった。だけど、今はそんなもの存在しない。ということは、思い浮かぶ方法は1つしかない。

—イメージする事—

すると、私の身体に変化があった。眼を開け確認すると、自身の身体を淡い緑色の光に包まれており視界の高さが先程より1.5倍程高くなった。下半身は2本の足ではなく、先端が赤く、白い鋭利な8本の脚。腰と呼ぶ部分は、蜘蛛の頭胸部と腹部が合わさった様な姿をしている。色は主に赤く、鋭利な部分は白や鮮やかな緑で構成されている。そしてその中心部分から女性特有の華奢な身体が現れる。露出が多少あり、纏っているのは緑と紫で出来たビキニの様な物と、肩近くまで伸びている黒のロングカバー、所々緑のラインが走っており手のひら部分は赤く、緑の爪が5cm程伸びている。頭は額、側頭部をひし形のアーマーを装備しており、額のアーマーは右眼も覆っている。後頭部には緑色の大きな十字の様なものを付けている。髪は鮮

やかな緑色、もみ上げはストレート、左右のアーマー下から伸びる髪はクルクルロール。

—そう、これが、この姿こそが本来の私の姿……【百害女王イビルガバナダークフェイス・グレドローラ】—

「おお！とても美しいお姿で御座いますつ、陛下！」

ダークフェイスが興奮気味に片腕を上へ上げ、私を褒めちぎる。あれ、オーラ効いてない？

「ダークフェイス、黙っておれ」

「っ!？」

ダークフェイスは両手で口を隠し数メートル後ろへ下がる。すると周りの子達がその様子を見てクスクスと笑みを零す。それを見たダークフェイスがぐぬぬ、と悔しそうにしている。

さてと、私自身も落ち着いてきたし……今の状況を調べるとしましょう。

「マルティナ、近う寄れ」

「ハッ！何かな。陛下」

【牡丹の銃士マルティナ】、「壮麗」の花言葉を持つ牡丹をイメージして生まれたバイオロイド。強く美しく、銃士の誇りも忘れない優秀な少女だが、功を焦って突出する所が玉にキズ……まあ、そこが可愛いんだけど。

「トウーレと、地下の森林広場からグランクワガモンを連れ門の前へ参れ。周囲の確認をする」

「陛下、それh——陛下自ら出られるなど！危険で御座いますぞ、陛下！その程度、マシニング部隊に任せr」

「ダークフェイス」

「っ!？」

マルティナの言葉に重ね、先程黙らせたダークフェイスが再び大声で意見する。私はもう一度名を呼び直す、ほんの少し怒りを込めて。するとダークフェイスは再び口に両手を当て、数メートル下がる。

「あ、あはは……しかし、陛下。ダークフェイスの言う通りさ。陛下自ら赴かなくても配下の私達が出れば済む話なのでは？」

マルティナはダークフェイスの意見を纏め発言する。確かにその通りだ・・・でも―

「此処が妾達の知る森林なら問題無いが。もし違った場合、そこは未知の世界だ。そんな所を子らに行かせるのは酷な事。故に、妾が周囲の安全を確認してから搜索へ移る。異論は認めん」

ダークフェイスは異論出来ない歯痒さに身を震わせ、マルティナはやれやれと言った表情をし、他の子達は納得した表情をしていた。

「すまぬな、ダークフェイス。お前には別の任を与える。メガコロニーの警戒レベルを最大に、戦う力の無い者達は安全な場所へ。ダークフェイス、頼まれてくれぬか？」

優しく微笑みながら声をかけると

「お任せあれっ、直ちに―」

そう言い終えると、玉座の間から飛んで行った。

「・・・ちよろいのお」

「いや陛下、陛下が一番言っちゃダメだと思うよ。とにかく、私の方は了解。数分で門の前へ向かうよ」

「うむ、よろしい。お前達はそのまま玉座の間に待機し、迎撃に備えよう」

他のその場にいる子供達に命令を下し、子供達は頷く。それを見届けた後、ネックレスに軽く念じて大樹の門の前に転移した。

「ここから見る限り、ただの森じゃな。危険な気配も今の所は無いようじゃし」

そう、私・・・いや、私の子供達だとしても現状強敵と思われる気配は何も感じない。森を見ながらそう考えていると門が開いた。そこから出てきたのはグレドローラとしての私より倍以上の大きさを誇るクワガーモン系の最終形態のグランクワガーモン。大きく発達した6本脚、ギラファノコギリクワガタを思わせる鋭利な鋏を持つ。

―見た目はカッコいいとか、怖いとか言われることが多いけど。頭を良く見ると中々可愛い顔をしている・・・と私は思う―

そして、グランクワガーモンの前脚に乗っている紅白のバイオロイド。赤い方がマルティナ、白い方がトゥーレ。この2人は双子で、姉

がマルティナ・妹がトゥーレ。トゥーレは姉のマルティナとは真逆の性格で、常に落ち着いて行動するタイプ・・・しかし、姉が傷ついたり無茶をすると泣いてしまう。というギャップがあり、この子も可愛い。

「陛下！待たせたね！現状一番元気のあるグランクワガーモンを連れてきたよ」

「ええ、最高のパフォーマンスができると思います」

「ほお、それは期待できる。では参るぞ、まずは大樹を中心に半径2キロ程行くぞ」

私はグランクワガーモンの頭部に飛び乗り、グランクワガーモンは羽を飛ばたかせ飛行を開始する。しかし、進めど進めど感じていた通り脅威となりえる存在の気配は感じ取れなかった。マルティナとトゥーレも同様に感じていたのか、私の顔を見て首を左右に振る。そして話した2キロ地点に到達し、グランクワガーモンは飛行を止め、地面に着地する。

「ご苦労だったね、グランクワガーモン。ご褒美はハウスに戻ったらね」

マルティナはグランクワガーモンの頭を撫でながら労いの言葉をかける。

「如何なさいますか、陛下。ここまで危険が無いを確認できましたし、戻りますか？」

「それだけでは味気無い、ここいら一帯に妾の糸を張っておく。人間なら助けると体してメガコロニーへ連れて行き情報を引き出せば良い。獣の類なら妾の子達の食料にすれば良い」

私は軽く上に飛び、樹の真ん中辺りの高さで軽く蜘蛛の巣を張りその上に立つ。そしてそこから糸を巡らせ周囲一帯に糸を張る・・・うん、これ位張っておけば何か掛かるでしょう。それにしても、この森もう少し進むと抜けるのね。

「ふむ・・・少し進むと森が抜けるようじゃな。マルティナ、グランクワガーモンと共にここで待機。トゥーレ、共をせよ。

「了解っ（です）」

私とトゥーレは森を歩いて行き・・・そして抜けた。そこには草原が広がっており、所々に街道の様なものがあり、大きな街が近くにあった。遠く離れた所にも似たような街が見えた。

「都市、でしょうか。陛下」

「そのようじゃな。しかし、今妾が人型になり行くわけにもいかぬ。

一旦戻り、策を練るとしよう」

「畏まりました、陛下」

私とトゥーレはマルティナの所へ戻り、グランクワガーモンに乗り直しメガコロニーへ帰還した。

### 第3話 アイテムショップ // 海援隊 //

メガコロニーへ帰還した後、マルティナにグランクワガーモン用の褒美を与えるように命じトウレは自分の階層へ戻り、私は人型になって自分の部屋へ戻った。

私はベッドの縁に腰かけ色々思考を巡らせる。探索範囲の拡大・都市へ侵入しこの世界についての情報・現時点で強敵になりえる存在の情報 e t c

—本当は私が都市に行きたいけど、子供達を置いて何日も離れるわけにもいかないし・・・商売や口の上い子に潜入任務を命じるとしよう。となると商人としての経験もある子は—

「成程、それで僕にという訳ですね」

様々な策などを考えた数日後。私はある子・・・いや、子達を政務室へ呼び、任務の内容を説明する。紅茶に舌鼓をしながら心地の良い返事を返してくれる。

「うむ、お前も知つての通り。妾の子らは蟲型や植物型が半分以上を占めている。擬態も可能ではあるが、本来の姿でないまま暫くの間過ごさせるのも可哀そうだからの」

私も紅茶を飲み、子の質問に答える。目の前の子と話しているとふよふよ浮いていたもう一人の子が頭にくっ付いてきた。

「おーい、ファイアー。お竜さんも構え〜」

「こちらこちら、お竜さん。陛下の頭にくっ付いてクルクル回らないの、こっちおいで」

今、目の前で私とお茶をしているのはサーヴァント、坂本龍馬とその相棒兼最愛の人のお竜。お竜は龍馬の言う事を素直に聞き、龍馬の隣に座り直し茶菓子を食べ始める。

「それで陛下、僕達はどの国へ行けばいいんだい？」

この数日、野盗と思われる人間から持ち物を回収した際、粗相な物であったがメガコロニーがある場所の周囲の地形が書かれた地図が入っていた。

「此処じゃ」

私が指さしたのは、この前確認した都市だ。名前が書かれていなかった為、都市名は不明。領土的には「バハルス帝国」に属している場所だ。

「バハルス帝国に属していて、此処から最寄りの都市、か。なるほど、ここからなら定期連絡もあまり時間をかけずに報告できるし、いざ逃げるときには森に入って撒けばいいってことか」

「逃げることなんてないだろう、龍馬はお竜さんが守るんだから」

「うん、ありがとうお竜さん。でも前に掛かった野党は置いておいて、この世界の人間達がどれ位の力を持っているかまだ不明だからね。慎重に行くんだよ」

「ああー、なるほどな。分かった」

「と、言う事で。早速この世界のレベルに合わせて販売品を決めてから出立するよ」

紅茶を飲み終えお竜と一緒に政務室を後にする龍馬。その姿を見送る私。そして部屋に自分しか居ないのを確認し、改めてソファに深く座り直す。

「はあ、やる事が全然終わらないわね。これからは搜索範囲も広げなきゃいけないし、日に日に情報が更新されるから纏めなきゃいけないし・・・ふふ、でもー」

「楽しい、と思う妾が居るのもまた事実・・・か」

窓から外の景色を見ながら、これからどんな世界を見ることになるのか楽しみな自分がいた。



—なんで、こんなことになった？俺達はあの商人に実力を認められてこの大樹に来た筈だ・・・なのに、此処に居る奴らは最高位冒険者や王国戦士長でも勝てるか分からない化け物揃いだ。特にヤバいのは、今日の前にいる蜘蛛人、こいつは人間が勝てる相手じゃないってことだけは分かる。その蜘蛛人は俺の仲間の魔力系魔法詠唱者の頬に手を添える。触れられた仲間は恐怖で動けなくなって、涙を流していた。しかし、蜘蛛人の言った言葉により、俺達4人は同時に気の抜けた声を出してしまった—

『本物の愛を知らずに育った少女よ、妾の娘となれ』

『『『へっ?』』』』

—某都市—

「それで、ヘツケラン。その商人というのはこの都市にいるんですか？」

都市内を歩く男2・女2の4人グループの全身鎧フルプレートの男性が、もう1人の男性に質問を投げ付ける。

顔の輪郭はがっしりした無骨な形で、髪は刈り上げられ、わずかに生えたヒゲは丁寧に入れられている為爽やかな印象を与える、名をロバーデイク・ゴルトロン。質問を受けた男性は歩き方を後ろ歩きに変え

「ああ、本当だつて。今ワーカー内で噂になっている商人でよ、中々良い商品を安値で提供してくれるんだ」

金髪に碧眼、日に焼けた健康的な肌をしており、顔立ちは美形ではなく帝国では十人並みの容姿をしているヘツケランと呼ばれた男性は答える。

「ええ、それ大丈夫なの？模造品とか、変な物じゃないんでしょうね」  
化粧はしておらず目つきは悪いが綺麗な女性、半森妖精のイミーナ。が、ヘツケランに疑いの言葉をかける。

「もちろんだ。そこで面白い物したことがあるワーカーや冒険者達から聞いた話だから信憑性は高い。それに店主も人柄が良いみたいでな、嘘は言わないタイプのようだ」

「珍しいね、そんな人・・・でも、ちよつと楽しみ」

他3人より背が低い少女は多少疑問は残るものの、期待に胸を膨らませていた。その少女は10代中盤から後半で金髪の艶やかな髪は肩口あたりでぎっくりと切られ、痩せぎすだが気品のある顔立ちをしている。しかし、表情は人形のような無機質さがある。名をアルシェ・イーブ・リイル・フルト。

「そういう商人と交流を持つのは今後の活動にも繋がるしな、それに聞いてみた事もあるんだよな・・・お！見えてきたぜ」

ヘツケランが指を指す。そこには既に数チームが店の前におり、商

品を見たり店主を談笑しているように見える。その店主の周りをふよふよ浮いている黒髪美女がいるのが気になる。4人が店に近付くと店主が気づき声をかける。

「やあ、海援隊、へようこそ。一応、僕自慢の商品を取り扱っているよ。見ていくだけでも大歓迎さ」

「いや、買え。そして感謝して多く払え、そしてお竜さんのおやつ代になれ」

「いやいや、そういうのダメだからね？ 買い物のお自由はあるんだからね？」

浮きながら手をくいつくいつ、として出すようにアピールする黒髪美女に落ち着いてツツコミをする店主。

「値段分は払うが、それ以上は厳しいな。今多くは手持ちが無くてな」  
両手をひらひらと振るヘツケラン、それを見た浮いてる美女は興味が無くなったのか店主の頭にくっ付いた。

「あらら、これは失礼。お竜さん、元々こういう性格だから気にしないでね」

苦笑しながら謝罪をする店主。それに対応するロバーデイク。

「いえいえ、大丈夫ですよ。それに買い物は目的なので金額は分かりませんが、幾らかは置いていきますよ」

それから4人は様々な商品を見ていった。他の店の半額の値段で状態が良いものがいくつもあり、流石の4人も驚き店主に仕入れ方法を尋ねると

―企業秘密―

と、それはもう良い笑顔で返されてしまった。そして満足のいく買い物をした4人は店を離れようとした。

「お買い上げありがとうございます、またのお越しを」

「この店を知っちゃったら、他の店には行けない……！ また来ます！」  
基本的に無表情な事が多いアルシエが、眼を輝かして言う。

「はは、そりやそうだ。そうだ、店主よ。聞きたい事があるんだ」

「おや、何かな？ 僕に答えられる事なら良いんだけど」

「アンタが知ってるって噂の【未開の大樹】の情報、俺達は知れる器か

？」

リーダーのセリフに、他の3人は驚きの表情を出し、店主は柔らかい笑みをしていたが、真面目な表情に切り替わる。

「・・・あの大樹は、つい最近僕とお竜さんが見付けた所なんだ。開拓された様子はなかったから、未開なのは間違いない。だけど、僕もお竜さんもしがない商人だ。そんな所に行く勇氣なんてこれっぽっちもないんだ、だから店に来る人達にあの周囲の話聞き、改めて未開というのを確定させた・・・だけど無闇やたらに教えるつもりはない」「何ですよ？アンタ達2人は行かないんでしょ？なら教えてあげても良かったじゃない」

イミーナが思った事を口にする。それに対し店主は目元をぴくつとさせ、更に鋭く返答する。

「言った通り、『未開』なんだ。大樹周囲・大樹内の敵戦力なんて全くの未知数、そんな所の場所を教えるなんて「そこで死んできたら」と言っているのと同じなんだよ。君は・・・それでも行きたいのかい？」  
「ああ・・・俺達は行きたい」

店主はリーダーの、そして他の3人の表情を見る。3人は初めは驚いていたが、此処に来た本当の意味がこれなのだ和理解し、リーダーに託している。

「・・・君達の実力、冒険者のプレートで言うとう？」

「俺達は『ミスリル』級、とよく言われている」

「ミスリル・・・」

—龍馬、ミスリルって上から何番目だ？—

—上から3番目だよ、お竜さん。今まで来たワーカーや冒険者に比べたら一番上だね—

—なら、こいつらで良いんじゃないか？お竜さんから見ても、ちよつとはやれそうだし—

—おや、お竜さん採点にしては珍しいね。因みに、誰と戦ったらって思った？—

—カブテリモン—

—下から2番目かあ—

「よし、ならお竜さんが教えてやろう」

「いい、良いのか？」

「但し、もし生きて帰ってきてもお竜さん達に文句言わない事。それと教えた場所を他の人間に教えない事。この2つを守るなら、だ」

お竜は2本の指を突き出し、ヘッケランに告げる。

「ああ、守る。アンタ達のような人とは長く付き合いたいからな」

— 僕達は、人、じゃないんだけどね—

「よし、なら地図を出せ—」

お竜が4人に大樹の場所・行き方を説明している中、龍馬は懐からカブトムシの様な生き物を取り出し、ある方に伝える為<sup>メッセージ</sup>伝言を付与する。

『4人組が近日侵入してくると思うよ、陛下』

付与し終わると空へ向けて腕を振り、カブトムシ—「シエルタービートル」をあの方の元へ飛ばす。我等が女王の元へ。

## 第4話 木精軍団将軍 ザミエールモン

図書館で読書をしていると侵入任務をしている龍馬から伝言メッセージを載せたシエルタービートルが図書館にいる私の元へ飛んで来た。労う為にシエルタービートルにゼリーを与える。龍馬を任務に向かわせた後大樹内の警戒レベルを下げ、子供達にはいつも通りに過ごすように伝えてある。たまに龍馬からお土産が来る、という事も。

「さて、龍馬が許可した人間の力・・・見せてもらおうとしよう」  
「あらあら、マスター。ここに人間を招くので？」

私と一緒に読書をしていたサーヴァント【ジャック・ド・モレー】、可愛らしく頭を傾げ問い掛けてくる。愛おしく思った私はモレーの頭を撫でる、モレーも気持ち良さそうに眼を細める。

「招く、ではない。言うなれば釣りだ。外に出ている龍馬から連絡があつてな、餌に喰らい付こうと泳いできておるのだ」

「でもさ、その餌って食べたら即死でしょ？」

「それは魚次第だろうな、魚に合わせてやる義理は無い」

私の返答に苦笑を浮かべるモレー。

「私達のマスターは怖いねえ、シエルビ」

「？」

ゼリー食べるシエルタービートルを撫でながら本人の目の前で平然と言うモレーに、シエルタービートルは頭を傾げる。

「ブレないなあ、この子。そして傾げるシエルタービートル可愛い」

「お前も気になったのなら、行っても良いのだぞ」

「私は他の奴らみたいに戦闘狂じゃないので遠慮します。まあ、私の階層に来たなら話は別ですけど、ね」

そういうと、モレーは再び読書に戻った。

「まあ、好きにせよ」

「龍馬に教えて貰った情報通りなら、もう少しの筈だ」

龍馬から情報を得た4人【フォーサイト】は、【未開の大樹】へ向けて森の中を歩いていった。

「トブの大森林のバハルス帝国側、森を抜けるとドワーフ王国の辺りだと思う」

「ドワーフねえ、別に興味無いわね・・・っ！静かに、んで伏せて」

軽口を叩いてイミーナであつたが、接近してくる音に反応し仲間に伝え伏せさせる。少し待つと聞いたことの無い音と共に蜂に似た金属の物体が飛行していた。動きを見るに自分達を見付け探しに来たのではなく、警備ルートに沿って飛んでいることが分かった。その物体は少しだけ止まり、周囲を確認すると来た方向へ戻って行った。

「な、なんだありゃー！」

思わずヘツケランが声を出す、それに対し驚いてはいるが好奇心の勝っているのか、アルシエは考えを持って述べる。

「蜂型の飛行ゴーレム・・・？そんなの聞いたことないっ、魔法が発展しているバハルス帝国だつてあんな物造れない」

「龍馬さんが言っていた未知数・・・想像以上の様ですね」

「ああ、しかも龍馬が言っていた場所はこの蜂が向かった方向だぜ。最悪だな」

苦笑し、大袈裟にやれやれといった感じで手を振る。

「どうする、ヘツケラン。逃げる？」

「冗談はよせて、もちろん行くぜ。最悪、バラバラになった際は龍馬が居た都市で集合だ。いいな？」

頷く3人、そしてレンジャーのイミーナを先頭に飛んでくるゴーレムを避けながら進んでいく。暫く進むと神秘的な雰囲気醸し出す

大樹を見つけることに成功した。

「うわぁ・・・凄い！」

「何とも神秘的な大樹ですね・・・今まで見つからなかったのは天候や時期が重なっていたのでしょうか」

「そして、この中にお宝があるのね」

「確定ではないだろうが、何かしら必ずあるだろうよ・・・さぁ、行くぜ」

「何だ、あの人間どもは」

大樹の枝で寝ころんでいたザミエールモンはフォーサイト4人を目視していた。スキルを使用していたわけではなく、ザミエールモン自体が小さく身体も緑の為4人は気付かなかった。手慣れた動きで弓矢を構える。

「侵入者ならここで仕留めるか・・・そういえば陛下が「たまに龍馬からお土産が来る」と言っていたが・・・。来るつてそういうことか。ふふふ、良い事を思い付いたぞ。さぁ、欲に塗れた侵入者よ、メガコロニー内で思う存分恐怖し、絶望するがいい」

果物を齧りつつ、不敵に笑うザミエールモン。



「よし、上手く入れたな」

「木の中って想像付かないけど・・・中々綺麗ね」

フォーサイトの4人が見たのは、木の中とは思えない程の花畑。所々に虫や妖精が飛んでいる。奥には森の様なものさえも見える。

「アルシエ、もしかして」

「うん、十中八九。此処は魔法の空間だと思う。普通木の中なんてこんな事にならない、入れたとしても虫食いの木みたいになつてはだもの・・・歴史的発見！」

興奮気味に、眼を輝かせ周りを見ながらアルシエはロバーデイクに返事をする。

「ふふ、アルシエつたら。珍しく凄い興奮しちゃつて」

「気持ちに分かるけどな・・・さて、こんな綺麗な場所だ。あまり戦闘にはなりたくない、端の暗めの所から奥に進むぞ」

仲間の同意を得て4人は魔法をかけ、気配を消しながら奥へ進んでいく・・・しかし、進めど進めど反対側へ着く気配がなく更に周囲が暗くなってきていた。

「な、なあ。確かに暗い方から進んでたけどよ・・・暗くなりすぎねえか」

「・・・もしかして、もう相手に私達がいる事？」

―木の葉の影や岩の下。そんなところに悪意は潜む―

「っ！散れっ！」

ヘツケランの言葉に即座に反応した3人は散開した、するとさつき

まで4人がいた場所の真ん中に【地面】からカマキリの刃のようなものが飛び出した。

「アンチイービル・プロテクション 対 悪 防 御、レッサー・ストレングス 下級筋力増大、レッサー・デクスタリテイ 下級敏捷力増大！」

避けて直ぐにロバーデイクは全員に強化魔法を唱え、他3人も戦闘準備を終える。そして地面から出てきた相手を見て先程までの好奇心に満ちていた顔を消え去り、全て恐怖と化した。

相手は自分たちより倍大きく背中に大きな羽を6枚生えており、逃げて直ぐ追いつかれると悟ってしまった。そして自分達を襲った刃は半分だった・・・その倍の長さがある刃が両腕にあった。

「偉大ナル女王陛下ノ統ベルコノ大樹へ侵入セシ者・・・万死二値スル！」

カマキリの化け物は魔法を唱えた男に狙いを定め右腕を振り上げた瞬間、杖を持った少女が仲間の為に隙を作る。

「フラッシュ 閃光！インヴェイジリテイ 透明化！」

「グッ・・・小癩ナ・・・何？」

カマキリの化け物は唐突の閃光に眼を瞑る。そして眼を開けた際には侵入者4人の姿が無かった。

「インヴェイ、何タラト言ッテイタナ・・・透明化カ」

そう言い残すと、追おうとはせず再び森の中に姿を隠した。

「はあ、はあ、はあ……」

逃げ切った4人は大岩の陰で息を整えていた。

「な、何よあの化け物!?! あんなの勝てないわよ!」

「予想外過ぎるぜ……もう、此処から出る事だけを考えよう。命あつての物種だ」

「うん……こんな所で死んでられないっ」

「粹がるのは結構だが、本気で逃げられるとでも思っているのか?」

自分達以外の声がいきなり聞こえ、即座に臨戦態勢を取り声が出た大岩の上を見る。そこには小さな妖精の様な生き物が寝そべっていた。

「貴方は何者ですかっ!」

「侵入者の述べる名などないが、まあ冥途の土産として特別に教えてやろう。私はメガコロニーを統べる女王に創造されし【木精軍団將軍】、ザミエールモン!」

大岩に立ち上がり、堂々とした態度で名乗りをするザミエールモン。それに対し、イミーナは無言でザミエールモンに矢の狙いを向ける。その態度を眼にして、初めはきよんとした表情をした後大声で笑いだした。

「あくはっはっは! 貴様、この私相手に弓矢で戦おうと言うのか! 本来なら相手をしてやっても良いが……私が相手では直ぐに決着がついてしまうと陛下に戦闘を禁止されていな。だから……私からのもう1つ土産をくれてやろう。ワस्पモン!」

ザミエールモンの声に反応し、周囲にワस्पモンが包囲する。

「あ、あれは外で見た蜂型の!」

「奴らを捕らえよ! そして……【最上階】へ運べ。このメガコロニーで最大の恐怖と絶望を抱いて死ぬがいい!」

見た目に反して素早い動きをするワस्पモンの群れに対し、成す術なく捕らえられてしまいザミエールモンの指示通り最上階へ向かい

飛んでいく。

## 第5話 ファイアーの想い

ワस्पモンに捕まったフォーサイトの4人は、指示を出した張本人ザミエールモンと共に最上階へ向かって飛んでいた。

「全く、近くの山脈にいるドラゴン付近の鉱石など採るなら領けるがよりによってこのメガコロニーに来るとはなあ。呆れを通り越して笑える、あっはっはっは」

ワस्पモンの頭部に乗った状態で大笑いするザミエールモン。その笑い声が嫌だったのかヘッケランがザミエールモンに問い掛ける。「俺達を何処へ連れて行くつもりなんだ。殺すだけなら、あの時こいつらにそう命令すれば良かったんじゃないか」

その問いに笑うのを止め、不敵な笑みを浮かべ

「さつきも言っただろう。【このメガコロニーで最大の恐怖と絶望を抱いて死ぬがいい】とな。だからそれが出来る場所へ連れて行く、それだけだ」

と、これから起こるであろう事を想像しながら告げる。そして上の階層の階段になる度に装飾がどんどん綺麗な物になっていった。そして最後の階段を上り終え、最上階へ到達する。木の中ということもあり、殆どが木製で作られた品が多かったがどれもバルス帝国の大貴族・・・いや、もしかしたら皇帝も所持していないと思わせる程の品だった。そしてその部屋の左側にはクワガタを連想させる化け物、右側には花を連想させる妖精?と思わせる者達が立ってこちらを見ている。

そして、部屋の奥。玉座に座っている女性、灰緑色のコートを身に纏い、紫色のマフラーを巻き、帽子の鍰が尖っている四角形の帽子を長い紅色の髪の上から被っていた。

―に、人間?人間の女がこの魔窟・・・いや、魔樹のボスだっというのか―

部屋の中心まで来ると、ワस्पモンが捕らえた4人に使用していた糸をいきなり切り4人はどん、と音を立てて落とされた。そして何も無かったかの様に持ち場へ戻って行くワस्पモン。そしてザミエー

ルモンは4人より少し前に行き、膝を付き首を垂れる。

「陛下、第1階層にて侵入者を捕獲致しました。私は力を振るうのを禁じられていた為、陛下にこの者達の処分をお任せしたいと愚考し、連れて参りました」

「そうか。ザミエールモンが第1階層に居たのが運の尽きだったの、侵入者よ」

そう言うと、立ち上がりザミエールモン・侵入者4人のもとへゆっくりと歩み寄る・・・離れている筈なのにその女性が言っているであろう言葉が耳元で聞こえる様だった。

―我が手繰るは無盡の糸、この手に堕ちぬ贄は無し―

そう言い終えると女性の身体が一瞬光、4人は思わず眼を瞑ってしまった。そして再び眼を開けた・・・そこには先程の女性が消え、代わりに蜘蛛人アラクノイドの化け物が立っていた。

「妾がこの大樹【メガコロニー】の主、百害女王イビルガバナダークフェイス・グレドーラ」

「あ、ああ・・・ああああ!？」

魔力系魔法詠唱者の娘が、悲鳴を上げた。恐らく、言い終えたと同じ時にとある指輪を外した事により、娘に蜘蛛人の魔力量が見えてしまったのだろう。

「あ、アルシエ!どうした、しつかりしろ!」

リーダー格と思われる男は前に居る仲間の肩を揺らす・・・しかし、振り返らず涙を流し、自分の運命が分かってしまった表情をしそのまま言葉を綴る。

「に、人間が相手にしていない相手じゃない・・・!」

―予想はしていたけど、こんな可愛い娘に悲鳴上げられて泣かれると、心にちよつと来るわね―

内心、シヨックを受けている私はそのまま少女の前まで行くと8本の脚を曲げ視線を低くし、腕を伸ばし頬に触れる。そして私は魔法を唱える。

「コントロール・アムネシア  
記憶操作」

私は対象の記憶の閲覧・操作・消去を行なうことができる魔法を使い少女の記憶を覗き込む。私は気になったんだ、他の3人なら冒険や探索をしても不思議ではない・・・だけど、恐らく20に満たな

い少女が何故こんな危ない事をしているのか。興味本位だった・・・  
そう、ただの興味本位だった。

彼女は貴族の娘だった。実家は100年以上バハルス帝国を支えていた貴族だったが、鮮血帝によって取り潰されてしまい、更には両親が

—鮮血帝さえ死ねば、フルト家が貴族として再興される！この金の消費は必要な消費だ！力を誇示することで鮮血帝にこの家がまだ屈していない事を見せつけるため—

と称して働きもせずに貴族生活を辞めなかったために借金が嵩み、その結果学院を辞めてワーカーとして働く様になった。

—まさか、異世界に来て自分と同じような境遇の人物に逢う事になるなんて—

そう、私もある会社の社長令嬢【だった】。母親は兎も角、父親がこの少女の父親と殆ど同じ言動をしていた。しかも、当時の私よりも若いこの少女が同じ思いをしており、更には親の借金の為に働いている。

—私より、立派ではないか—

「へ、陛下・・・っ!?陛下が涙を!?!」

ザミエールモンに指摘され、気が付いた。

—あれ、私。泣いてたんだ—

「小娘！陛下に一体何をs」

「ダークフェイス!」

「っ!?!」

苛立ちを見せ、攻撃を仕掛けようとしたダークフェイスにいつもより強く指摘してしまった私。ダークフェイスも思いもよらなかったのか、かなり驚いた表情を見せる。私もこんな大声出したのは久しぶりだ。

私は視線をダークフェイスから再び少女へ向ける。こちらは一瞬驚いた表情をしていたが、視線を戻すと再び涙を流す。

—私は、母親からは【愛】を受ける事ができた。しかし、この娘はこの歳で親から受けた多少の【愛】を【借金返済】という形で返して



いる・・・そんなの可笑しい、子供が親の後始末をするなんて。親はこの娘の想いをどう思っているのだろう、いやそもそも気付いているのかさえ疑う所だ―

私が母から貰った【愛】、今度は私があげたいと思った・・・だから、私は素直に1つの提案をする。

「本物の愛を知らずに育った少女よ、妾の娘となれ」

「「へっ?」「」」

「へ、陛下っ!?!」

4人は間の抜けた声を出し、ダークフェイスとザミエールモンは驚きの声を出す。

「聞こえなかったか? 妾の娘となれ、と言うたのだ。アルシエ・イーブ・リイル・フルト」

「わ、私の名前・・・どうして?」

私は頬に触れていた手を離し立ち上がる。

「先に謝罪しよう。妾がお前の記憶の中を見たのだ。故に名前も、家の事も、全て把握した・・・その上での提案じゃ」

「き、記憶を見た、のですか・・・? 全て?」

「その通りだ、ロバーデイク。イミーナ。ヘッケラン」

「あ、あたし達の名前まで」

「ほ、本当っぽいな」

「うむ。妾の魔法、コントロール・アムネジア記憶操作は対象の記憶の閲覧・操作・消去を行なうことが可能だな。この娘が双子の妹達をととても大切にしていることも、な」

私はアルシエを見ながら優しく微笑み【女帝のオーラ】を発動させ頭を撫でてやる。最初はビクッ、と身体を震わせたが、すぐ落ち着いたのか素直に撫でられる。

「あ、えと・・・あの、その・・・」

いきなりの問いに、頭がパニックになるアルシエ。

―まあ、そうなるわよね―

「整理が追い付かぬようだな。まあ、それも仕方なからう。先程まで自分らを殺そうとしていた相手にこの様な問いを出されたのだ、少し

整理する時間をくれてやろう。トウーレ」

「はい。何でしょうか、陛下」

「この者達を客人に変更する。メガコロニー内全ての子らに知らせよ、彼奴らに危害を加える事は妾の顔に泥を塗る行為、とな」

「畏まりました、陛下」

「うむ。それと、ザミエールモン」

「は、はっ」

「お前は良き働きをした。その功績を称え褒美をやろう、考えておけ」  
「有り難き幸せ、では後日お伝えに参ります」

「よろしい。では、愛しい子供達よ。己が責務を全うせよ」

私はそう言い残すと人型に戻り、ネックレスに念じ自室へ転移する。

「・・・助かった、の？」

「そ、そうみたいです」

「初めてアルシエの親に感謝したぜ・・・」

へなへなど、力なく床に座り込む3人と未だポカンとしている私。  
そこにザミエールモンが声をかける。

「命拾いしたな、人間。先に言っておくが陛下は慈悲深い御方ではあるが侵入者を生かし、更には客人へするなど過去になかった事だ。光栄に思え」

そう言い残し、ザミエールモンは玉座の間を後にする。そして残ったダークフェイスと呼ばれたクワガタ怪人と、トウーレと呼ばれた白

い花の妖精と、その妖精に似た赤い妖精・他の花の白い妖精の合計4人。

「あ……あ……ありえん！メガコロニーの母が！女王が！人間ごとkー」

「うるっさい！」

喚き散らすダークフェイスに対し、赤い花の妖精の方が何処から取り出したのかは分からないけど白い紙を何重にも重ねた物で思いつ切り引っぱっていた。スパアン、と初めて聞いたけど心地良い音が響いた。

「ぐはっ!?な、何をするマルティナあ！」

「毎度の事ながら一々オーバーリアクションなんだよ、キミは。それに陛下の決定だ。そこにキミの我儘を加えるつもりかい？」

「何だとマルティナ！」

「事実だろうがっ！」

今私の目の前でクワガタの怪人と赤い花の妖精さんが一触即発な状態になつてる……助けて。

「ていつ」

なんて考えていたら可愛らしい声と共に2人の頭がほぼ同時に叩かれた。

「痛っ!?!」

「いい加減にしなさい、2人共。客人の前ではしたない」

2人の妖精の後ろに立っていた別の白い花の妖精さんが一触即発の2人を鞘で叩いたんだ。

「しかし、セシ姉え！」

「貴様っ、セs」

「そんなに喧嘩がしたいなら……私が相手になるぞ？」

言った途端、セシ姉と呼ばれた女性の黒い光輪が現れ先程迄の優しいような妖精からガラツと雰囲気が変わった。

「っ!?!」

この姿に流石の2人も怖いのか、それ以上何も言わなくなった。それを確認すると黒い光輪を消して私達と向き合う。

「見苦しい所を見せてしまい、ごめんなさいね。私は『白百合の銃士セシリア』、呼び方は貴方達に任せるわ。それでさっきのは、まあ此処の日常と思ってくれればいいわ。トゥーレ、メガコロニー内の全員に伝え終えた？」

「ええ。そこ2人が喧嘩してる間に4人の顔を映して伝えておいたわ」

トゥーレさんの腕には見たことの無い細長い虫がいた。あの虫で伝えたのかな。

「流石トゥーレね。それじゃこのまま4人を客間へ案内してくれるかしら？」

「分かったわ、セシ姉。それじゃあ、4人共私に付いてきてくれるかしら？」

私達4人は素直に頷き、トゥーレさんの後を付いていく。

「・・・行ったわね。さあ、2人も持ち場へ行く！」

セシリアの号令により慌てて自分の階層へ向かうダークフェイスとマルティナであった。

## 第6話 新しい家族

トウレさんに案内してもらい、歩いて行くと転移する感覚に襲われ思わず目を瞑る。少しして眼を開くと森全体が紅葉している森の中だった。森の綺麗な景色に私達は眼を奪われていると、少し先に歩いていったトウレさんが私達に気付き戻って来てくれた。

「どうしました、4人とも？」

「あ、ああいや。こんな綺麗な森、見た事がなかったからさ」

「ふふ、そういう事ね。ああ、そうだった。自己紹介がまだだったわね。私の名は【牡丹の銃士トウレ】、マルティナ姉さんの双子の妹。軽くお辞儀をしながら自己紹介をするトウレさん。私達は慌ててお辞儀をする。私も自己紹介をしようと言おうとしたらトウレさんの人差し指が当たった。

「キミから・・・いや、キミ達はまだいい。お客様に名を名乗るのは当然のこと。貴方達から聞くのは、またの機会に」

そう言いながら優しく微笑むトウレさん。背景と相まって綺麗な絵と思う程だった。そして再び綺麗に整えられた道を歩いて行く。すると大きな屋敷が見えてきたんだけど・・・

「こ、こんな大きな洋館初めて見た・・・でも、高さが低め？」

「この建物は洋館ではなく屋敷と呼ばれるものよ。周りの楓の森に合わせて陛下がお造りになったの。そして、このお屋敷を任されているのがあの子よ」

そう言いながらお屋敷の周囲に咲いている花に水をあげている少女が立っていた。ピンク色の花が添えられた黒く鏢の大きい帽子を被っていて黒のマント・ピンクと白の服・黄色で長いブーツ。腰にはピンクのポーチに金属の見た事の無い武器に大きくて長い針の様な物を装備していた。その少女がこちらに気付くと笑顔でこちらに手を振りながらこちらへやってくる。

「お屋敷の御勤め、ご苦労様ね、リアナ。ご紹介します、この子はリアナ。私と同じ銃士隊の1人よ」

「初めまして、私は【蓮の銃士リアナ】と申します。リアナと呼んで下

さい、お客様」

「「よ、よろしくお願いいたします」」

「それではリアナ、私は自分の階層に戻るからお客様をよろしく」

「はい、任せて下さい。トウーレさん」

そう言い残すとトウーレさんは自分の階層へ戻っていき、私達はリアナさんの案内のもとお屋敷の中へ入り部屋へ案内してもらった。

「それでは、何か御用が御座いましたらこのベルを鳴らしてください。すぐに参りますので」

そしてリアナさんも職場へ戻り、部屋にはフォーサイトだけになった。

「・・・で、どうすんだ。アルシエ」

「っ・・・」

「正直な所、あたしは良いと思うけどね。アルシエには悪いけど、あたしなら縁切ってるわ」

「現実を知るのに良いのではないですか？」

「俺も同意見だ。少なくとも此処なら不自由な生活はしなくて済むしな」

「・・・少し別の部屋で考える」

私はそう言って部屋を後にして、お庭にいたリアナさんに声をかけた。

「リアナさん、お願いしたいことが―」

「・・・疲れた」

予想外の出来事に疲れた私は自室のベッドに倒れた。

——いやだって、異世界なのに元の世界の私と殆ど同じ境遇の・・・しかもまだ学問を学ぶべき歳なのにこんな危険な仕事をして親の借金返済・・・そりや保護したくもなるわよっ——

「でも、仮にあの子が受け入れたとしてもそれは断った時が怖いからよね・・・ああ、ちゃんとそういつた事も伝えておくんだった。恐怖による服従は将来的に必ずと言って良いほど爆発して反旗を翻すし」  
「考えれば考える程マイナスに行ってしまう、私の悪い癖の1つだ。」  
「ああ〜ダメだダメだ。こういう時は本でも読もう」

ベッドから起き上がり身だしなみを整えて図書館へ轉移しようとした時にノックが聞こえた。

「陛下、お時間よろしいでしょうか」

「トウーレか、如何した」

「はい、アルシエ様が陛下にお話しがあるとの事でお連れしました」  
「そうか。では政務室へ案内せよ、妾も身支度を整えてから向かう」  
「畏まりました」

——あの子が私に？決断には早すぎるし・・・自分が犠牲になる代わりに何かの交渉を？——

「取り敢えず行けば分かるわね」

私は少しの不安を抱きながら政務室へ向かった、もちろん人間の姿で。部屋には私とアルシエのみ、トウーレは廊下で控えている。

「それでどうした、アルシエよ。先程別れて一刻も過ぎておらぬぞ？それともあの屋敷は人間には不都合だったか？」

「い、いえ！そんなことはないですつ、とても居心地良くて落ち着きます。そうではなく・・・お、お尋ねしたい事が」

「ほお・・・何じゃ?」

「な、何故私を娘にすると・・・?ザミエールモン、さんが言っていました。【侵入者を生かし、更には客人へするなど過去になかった事】と」  
「その事か・・・妾の友の過去と、お主の現状が酷似しておるのだ」

私は立ち上がりアルシエの隣に腰を下ろし、自分の過去を友人と言  
い換え質問に答える。アルシエは怯える事は無く首を傾げる。

「ご友人の過去と、私が・・・?」

「うむ。あの時の妾には力が無くてな、とても悲しく悔しかった。お  
主の過去を見た時に思い出してな、それで思ったのだ・・・護りたい、  
と。じゃが、これは妾の勝手な想いだ。お主が妾の我が儘を聞く必要  
は無い。もし断ったとしても、此処についての記憶のみを消して森の  
出口付近に轉移させるつもりじゃ」

私は笑顔で話しかけ、優しく頭を撫でて上げる。気持ち良かったの  
か、眼を細めて撫でられてくれるアルシエ。

—うん、可愛い—

「妾の娘になるか否か、それはゆっくり考えr—」

そう言い残して立ち上がり部屋を出ようとした際に服の裾を引っ  
張られた。振り返るともう答えは決めているか、しかし照れくさいの  
かほんのり頬を染めていた。

「あ、えっと・・・私はまだ子供だし、魔法もまだ未熟だし、迷惑ばか  
りかけてしまうかもしれないけど。グレドーラ様がお母さんになっ  
てくれたら、嬉しい、です」

「ほ、本当に良いのか?妾が言うのもなんだが妾は蜘蛛人で、歳は取っ  
ておるが人型での見た目的には母というより姉に近いぞ?」

「もちろん、です」

はにかみながら笑顔で答えるアルシエの顔を見て、力が抜けた私は  
再びアルシエの隣に座った。

「ふふ、そうか・・・では、これからよろしく頼むぞ。妾の愛おしい娘  
よ」

私はまたアルシエの頭を優しく撫で、アルシエは気持ち良さそうに  
眼を細め



「はい、よろしく願います。母様」

笑顔で答えるのだった。

「うむ・・・トウレ、入れ」

私の指示に従い部屋の中に入るトウレ。

「トウレ、アルシエは今をもって妾の娘となった。明日にでも皆に伝えよ」

「承知致しました、陛下・・・という事は、私の【妹】と言っても過言ではないですよ？」

「ん？まあそういう事にもなるな」

私に確認するとトウレはアルシエの前に立ち

「はあ、可愛い。なんて可愛いのでしょうか」

トウレは豊満な胸の中にアルシエの頭を埋め抱き締める。

「とと、トウレさん!?!」

「ふふ、そういえばトウレは可愛い物好きだったな。そして自分が妹だから姉というのに憧れを持っていたのであろうな。良かったなトウレ、念願の妹じゃな」

トウレは心底嬉しそうな表情を浮かべたままアルシエを抱き締め、アルシエは柔らかい胸の感触に顔を真っ赤に染める。

「ふふ、では妾は部屋に戻る。トウレ、堪能したらちゃんとアルシエを屋敷へ送るのだぞ・・・っと、そうだ。アルシエにはこれを渡しておかなければな」

私は不意に右腕を前に出す。すると黒い靄のようなものが現れ私の腕は靄の中に消えた。その様子を見ていたアルシエは驚いていたが、私はただアイテムを漁っているだけなのだ。

―私も最初、欲しいアイテム思い浮かべながら何となく腕を前に出したら靄が出たり腕先が消えたりとかなり驚いたな―

私は目当ての物を見つけると靄から腕を引き抜きアルシエの前へ行き、それを手渡す。

「これを身に付けておきなさい」

私が渡したのは、私が所持しているメガコロニー内を好きに転移出来るネックレスとネックレスと同じ模様が施されたフィンガーレス

グローブ。

「母様、これは？」

「ネックレスはこのメガコロニー内を自由に転移出来る物だ。そしてそのグローブは念じれば妾の愛おしい子供達がお前の想いに応えて転移してくれる物だ。身の危険を感じた時や、仕事で苦戦している時にでも使うが良い。しかし、使う時は周りの人間には気を付けるのだぞ。下手をすれば奪おうとする輩も現れる可能性がある・・・万が一、そういった状況や命の危険があった場合グローブで母を想え、必ずお前を守る」

頭を優しく撫でながら私の想いを伝えた。それを受け取ったアルシエはトゥーレに抱き締められたままだが、何とか2つを身に付ける。

「良く似合っていますよ、アルシエ」

ようやく抱擁を解いたトゥーレは2つの装飾品を身に付けたアルシエを褒める。そして褒められて照れるアルシエ。

「では、妾は今度こそ部屋へ戻る。アルシエ、甘えなくなったら妾の所へ来て良いからな」

優しく微笑みながら言うと、今度は頬を赤くするアルシエ。その顔を見て満足した私は部屋へ転移した。

「こんな凄いお宝、私なんか貰って良いのかな」

私は母様が転移で去った後、受け取った秘宝とも言えるアイテムを見ながら呟く。

「もちろんですよ、アルシエ。貴女は今やメガコロニーの宝と言っても過言では無い存在になったのですよ」

「わ、私が？」

「ええ、もちろん。メガコロニーの皆、似た様な事を言う筈ですよ」

ふふ、と笑顔で答えてくれるトゥーレさん。

「と、トゥーレさん。ダークフェイスさん、も？」

「私の事はトゥーレ姉ねえや姉様、姉さんと呼んで欲しいわ。それとダークフェイスの事だけど、あれは初めは喚くと思うけど、少し経てば認めると思うわ」

ぽんぽんと、頭を撫でながら説明してくれるトゥーレ姉さん。

「じゃあ・・・トゥーレ姉様」

「っ！」

笑顔で姉様の名前を呼ぶと母様が居た時と同じ表情をされた。喜んでくれたみたい。

「うん、それでお願いしますね。それでは屋敷に戻りますよ、アルシエ」

姉様は私に手を差し出し、その手を取る。そして姉様の導きによって私は屋敷に戻り、仲間達に母様の娘になる事を伝えたが3人は分かってたといった顔をしていた。

「問題は、あの親と妹達か」

「そうね・・・でも、あの御方なら上手くやってくれるんじゃない？」

「ええ、妹さん達の事も把握した上での提案と言っていましたしね。必ず2人も助けてくれる筈ですよ」

「うん・・・母様を信じる」

—ふふ、今日からはいつもより良く眠れそう—

## 第7話 アルシエの決断

アルシエが娘になった数日後、私は4人のいる屋敷へ来ていた。私に気付いたリアナが近寄って挨拶をする。

「こんにちは、陛下。何か御用ですか？」

「うむ、4人にな。このメガコロニーの階層等について話をしようと思うてな。先日ネックレスを渡したが肝心の転移先を教えてなかったからの」

「あはは、なるほどです。4人なら屋敷でのんびりしていると思いますよ」

「うむ、分かった」

リアナに4人の場所を聞いた私は屋敷に入り、4人が居るであろう部屋の襖を開ける。そこにはそれぞれが本当にのんびりと過ごしていた。

—うん、警戒されていないようで良かった—

まあ4人からしたらいきなり此処の主がいきなり来たからそりや驚くわよね。姿勢を整えようとする4人に対し手で制し楽にするように伝える。

「こんにちは、母様。何か御用でしたか？」

「うむ。先日メガコロニー内を転移出来るネックレスを授けたであろう？しかし転移先の事を説明していなかったと思うてな、故に説明をしに来た・・・と言う訳じゃ」

私は座布団に座り此処に来た理由を告げる。

「しかし、妾だけだとそなたらは緊張して話どころではなくなってしまうと思うてな。説明役を呼んでおる。そろそろ来ると思うが—」

「陛下く御命令通り参りましたよくどちらに居られますか」

すると透き通った女性の声が聞こえた。私は聞き慣れているが、他4人は頭に？マークを浮かべていた。

「妾は此処じゃ、部屋に入って参れ」

私が場所を伝え少しすると襖が開かれた。そこに立っていたのは蒼い蝶を模した女性、この子は敵に対してはDSだが味方には優しい

という設定をしている。まあ、煽り位はするけど。

「紹介しよう、この子は翹壁怪神モルフオシアンじゃ。主に妾の戦闘時の防御役を担当しておる子じゃ」

「初めまして、お客様にお嬢。陛下にご紹介頂いた 翹壁怪神モルフオシアンよ。メガコロニーの防衛面を担当しているわ」

ヒラヒラ、と陽気に手を振るモルフオシアン。この子の性格ならこの4人にも親しみやすいと思ったのだけど、4人の表情を見るに大丈夫そうね。

「ではモルフオシアン、メガコロニー内の説明をしてやつておくれ」  
「了解です、陛下」

そう答えるとモルフオシアンは指を鳴らす。すると彼女は元の世界の教師服に身を包み指示棒を持っていた。そして連れて来ていた映像蟲を起動させメガコロニーの大樹を映し出す。

「まず、この映し出されている大樹がこの「メガコロニー」。まっ、侵入したから分かるわよね」

モルフオシアンの設定通りの軽い煽りに4人はうつ、と声を出す。それを見てクスクスと笑うモルフオシアン。

「でも、本来なら侵入なんて出来ないのよね。あの時は陛下の命令で警戒レベルをかなり下げてたから侵入出来たのよ、ここ重要。そして現在のメガコロニーの周囲はこうなっているわ」

映像蟲に指示を出しメガコロニー周囲の森に視点を切り替える。するとそこには空飛ぶ要塞の見た目をした蜂の様な生き物が宙に浮いていた。流石に4人も驚いていた。

「この大きな蜂はキャノンビーモン。普段は装甲を迷彩にして遠くから発見されにくくして、メガコロニー周囲の警護をしているわ。貴方達がザミエールに捕まった時、ワस्पモンが居たでしょ？あのワस्पモンはこのキャノンビーモンから生まれているわ」

まあ、そのキャノンビーモンも陛下が創造してるんだけどね。と付け加えて説明するモルフオシアン。

「更に警戒レベルが高いと他の子達も出るけど、それはまた今度ね」  
外の警備についての説明を終えるとメガコロニーの断面図に映像

が切り替わる。

「まず、このメガコロニーは第1階層から第10階層、そしてその上に玉座の間。地下は地下第1階層から第3階層までであるわ」

指示棒で各階層を指しながら説明をしていく。

「階層は全て森の様な所なのでしょいか」

ロバーデイクが手を上げ質問を投げる。

「森もあるけれど、貴方達が見た事がない、想像もつかない階層になっているわよ。それとすべての階層が戦闘が発生するわけでもないの、それが地下第3階層。地下第3階層は云わば娯楽施設、遊びはもちろんお風呂やマッサージ等も充実していて全く退屈しないわ、私が保証してあげる」

ふふ、と微笑むモルフオシアン。その言葉に期待を膨らませる4人。

「個人的に楽しみたいものや、時間やお金が無くて現実では受けられない欲望を形にただけなのよねー」

など、メガコロニーの女王である自分は口が裂けても言えない。

「玉座の間以外の階層には【階層守護者】と呼ばれる担当している階層を守護する責任者が存在するわ。そっちの紹介はー」

「その機会を妾が設けよう。この地へ転移してから、招集してなかったしな」

「色んな子作ったからなあ、どんな感じになってるのか楽しみねー」

「ど、いうことなので後日顔合わせがありますので紹介はその時に」

「はい、分かりました」

「では、大体の説明はこれ位ですが・・・良いですか、陛下?」

「うむ。詳細は招集の時に話すとしよう」

説明会を終えモルフオシアンは自分の階層へ戻り、私も自分の部屋へ戻りある事を考えていた。

説明会から更に数日後、再び屋敷を訪れた私はアルシエに考えていた事を話す事にした。

「アルシエ。お主らが此処に来て幾日が経った訳だが……不自由はあるか、他の3人も」

私の問いに首を縦ではなく横に振った……うん、嬉しい。

「そうか、なら良い。であればアルシエ。今から出掛ける故に支度をするのじゃ」

「母様、何処に行くの？」

「ん？お前の【元】家じゃ」

「っ！」

アルシエは遂に来たつ、と言いそうな表情をし他3人も似た様な表情をする。

「お前を呪縛から解き放つ。先に言っておこう、アルシエ……妾はあなたの両親を生かすつもりは無い」

その言葉に4人は眼を見開いた。

「彼奴等の生死はともかく、妾の娘となったのであればその家は不要じゃ。アルシエと双子の荷物以外全て売ってしまえば、上手くいけば借金が無くなるかもしれないな」

「確かに……あれらと家も売ってしまえば無くなるとは思う、けど」  
アルシエが不安そうな眼差しを私に向ける。まあ、目の前で親を殺

すと似たことを言えばそりゃそういう表情をするわよね。

「これはあくまで妾個人の意見じゃ。アルシエ、妾はお主の意見を尊重する。再び相まみえた際に聞かせておくれ」

「・・・はい」

「妾は屋敷の前に居る。支度が済んだら来るのじゃ」

私はアルシエにそう告げると部屋を後にした。

「アルシエ・・・どうすんだ？」

ヘッケランはアルシエに問いかける。その質問はもちろんアルシエの両親の事だ。

「確かにいつも私達はアルシエの両親に対して色々言ってたけど・・・」  
「ええ、あの御方が出られるなら確実にこの世を去ることになるでしょうね」

「私は、もうあの2人の子ではない。でも、もし、万が一心変わりしたらお願いしてみる・・・それじゃ、行ってくるね」

準備の終えたアルシエは部屋を後にしフィアーの元へ歩いて行く。

アルシエの記憶から得た記憶を頼りに【ゲート転移門】を使用し、家の近



くの裏路地へ転移しアルシエの案内で門をくぐり中へ入る。

「ほお、記憶では見ていたが中々広いではないか。これほど大きな土地だ、売れば借金分より得られるかもしれぬな」

「そうなれば良いんだけど・・・母様、2人に会ってどうするの?」

「アルシエが妾の娘となったことを告げる他に、申しておきたい事があつてな。まあ、後者はアルシエの行動次第によつては変わる事になるがな」

私の台詞に首を傾げるアルシエ。私は「気にするな」と頭を撫でてあげ、アルシエは気持ち良さそうに眼を細める。そして私はアルシエと共に家へと入る。アルシエの後に続き両親が居るであろう部屋を目指す。少し歩くと2人の男女の声が聞こえた・・・着いたようね。「母様、私・・・少し話したい事、確認したい事があるの。だから少し時間が欲しい」

「うむ、良いぞ。話が終わったら妾を呼ぶのだぞ」

私は怖がらせないように優しく笑みを浮かべて答える。それに安心したのか、安堵の表情をするアルシエ。アルシエは私に背を向け、ドアの前に立ち深呼吸をしてから部屋の中へ入る。

「・・・ただいま、今帰った」

「おお、お帰りアルシエ。予定より大分かかったようだが・・・予想外の事態にでもあつたんじやないかと話していたんだよ」

「貴女が無事で良かったわ。他の方も大丈夫そうね」

——ここまでは普通の家族の会話だ。私が聞きたいのはこの先——

「心配かけてごめん・・・っ! そのテーブルに置かれている置き物は?」

「これはかの芸術家、ジャン・シャルルが作った——」

「仕事に出る前はそんな物無かった! 何故そんな物がある」

「それはこれを買ったのが、家を出た後の事だからさ。金貨15枚だったかな? 安かろう?」

「・・・何故、買った」

私の質問に父は、何を言っているんだと言いたげな顔をし

「貴族たる者、こういった物に金を使うものだ」

と、悪びれなく言い切ったのだった。

「もううちは貴族ではない！何度も言ってるじゃないか・・・」

「なら何度も言ってやろう、違う！あのクソツタレな皇帝が死ねば――」

「もうそのセリフは聞き飽きた！少しでも期待した私が愚かだった・・・」

「愚かなのはお前だ、お前も貴族の娘。貴族らしく――」

「私と一緒にするなっ！私は貴族ではないっ・・・はあ、はあ。もう、良い。これ以上話しても、無駄・・・私は妹達を連れて出ていく」

「今の今まで暮らしてこれたのは誰のお陰だと思っている！」

「もう恩は返した・・・【母様】」

そして私は・・・私を愛してくれる方をお呼びする。

2人はきよとんとした顔をしていたが、関係無い。私の声に応じてくれるかの様にドアが開き、私の母様が入ってこられる。

「な、何者だお前は！」

「本来なら名乗らなくても良いのだが、妾の愛おしい娘の生みの親なら致し方あるまい。妾はグレドローラ、アルシエの新たな母である」

堂々とした立ち振る舞いで言い切る母様――素敵

「あ、新たな母だと!?何を巫山戯た事を言っ――」

「この妾が巫山戯た事を述べる為にわざわざ来る訳がなからう。これはケジメじゃ・・・アルシエ、良いのだな？」

「・・・はい。何を言っても無駄でした」

「宜しい・・・貴様らはたった今、人としての宝を捨て妄想の宝を手にしたのだ。おめでとう」

母様は私の前に庇う様に立つと皮肉めいた台詞を綴り拍手を送る。

「な、何を言っているのだお前は！今なら不法侵入した事は見逃してやる、さっさと出て行け！」

「言われずとも、用事さえ済めば出て行く・・・用事は、アルシエからお前達という鎖を外す事だ」

そう言い終わると同時に母様は右腕を前へ振り上げた――と同時に2人の身体が蜘蛛の糸の様なもので縛られていた。

「な、何だこれは!?!早く外せ！」

「それが頼む者の態度か？まあ、仕掛けたのは妾だから仕方ないがな」  
ケタケタと笑う母様。そして次は一気に冷めた雰囲気変わった。  
「本当に、愚かじやのう・・・お前達は。この子が僅かに期待した希望  
を見事に粉碎したのだから」

「何を訳の分らない事を——」

「それが貴様らの罪だ・・・だが、妾はそんな貴様らに2つだけ感謝し  
ておる。1つ目はこの子を産んだ事、2つ目は・・・貴族で無くなっ  
たにも関わらず貴族めいた生活をしてくれたおかげで妾はこの子と  
出逢えた。その愚かな行為を褒めてやるのだ、光栄に思え」

母様が言い終えると2人と母様の足元に魔法陣が展開される。流  
石に驚いたのか2人はじたばたしていたが、母様は平然としていた。  
恐らく母様が仕掛けた物なのだろうと考えていたら、母様がこちらを  
向き

「これより先はあまり見て良くないものだから場所を移す。アル  
シエ、お前は妹達に説明を。荷物を纏めておくのじや」

優しくそう言い、転移して何処かへ行ってしまった。

—さようなら、そしてありがとう。おかげで母様に逢えた—

—数日後、路地裏で切り刻まれた男女の遺体が見つかったそうさ。  
噂ではエ・ランテル付近でも刺突で絶命した遺体が見つかったという  
話もあり、その仲間ではないか。という結論へ行き、切り口が鋭利  
だった事を考慮し今後警備の強化、調査が進められるそうさ。そうそ  
う、親が亡くなったから借金が私に移行したんだけど、母様に言われ

た通り私達姉妹の必要物以外全部売ったら借金が無くなり手持ちが少し増えた程だ。そして身軽になった私達は荷台に荷物を乗せ、あの森へ向かった。母様が居るあの森へ――

## 第8話 女王の本心

「ねえねえ、お姉ちゃん。ボク気になってたことがあるんだけどね」  
「ん、どうしたのマーレ。改まって・・・あたしに答えられればいいんだけど」

とある地下大墳墓、その最下層に2人のダークエルフが話をしていた。

お姉ちゃんと呼ばれた彼女の名は『アウラ・ベラ・フィオーラ』、外見は10歳程度の少女で、金髪のショートヘアに瞳の色が緑と青のオッドアイに褐色の肌と長く尖った耳を持つダークエルフ。

マーレと呼ばれた彼の名は『マーレ・ベロ・フィオーレ』外見は姉と同じだが姉とは配色が逆の緑と青のオッドアイ、そして1番特徴的なのは・・・スカートを履かされ女装していること。この2人でナザリック第六階層「ジャングル」の守護者である。

「此処の旗は至高の御方達の物なのは勿論分かってるよ？でもあの旗は誰の物か分からないんだ・・・お姉ちゃんなら知ってるかなって」  
そう言いながら玉座の間の入り口端にひっそりと掛けられている旗。黒地の布に緑色でカブトムシの角の様な物が上下に向いており、左右にピラミッドの様な模様、その間に小さい丸模様が複数ある旗を指さしながら旗の元まで歩いて行く。アウラも見ながら近づいて行く。

「え、あんな旗あったんだ・・・んゝあたしも知らないなく。でも、此処に掛けられてるってことは至高の御方の1人ってことだよね？そんな御方を私達が知らない訳ないし・・・でも知らないし」

姉弟揃ってうゝんと考えていると後ろからコツコツと誰かが近付いてくる足音が聞こえた。

「2人とも、そんな隅で何をしているんだい？」

「あ、デミウルゴスにアルベド・・・ねえ、2人はあの御旗何方の物か分かる？」

『デミウルゴス』、ナザリック第七階層「溶岩」の守護を任された階層守護者の悪魔。インテリめいた服装をしておりナザリック最高峰

の頭脳の持ち主である。

『アルベド』、腰から黒色の天使の翼、こめかみから生えた山羊の如き角、縦に割れた虹彩と金色の瞳等奇異な点はあるが普段は絶世の美女といつてよい姿をしている。階層守護者統括。

「あの御旗・・・記憶に無いわね。デミウルゴスは？」

「ふむ・・・すまない。私の記憶にも無いな。しかし、飾られているという事はナザリックに、それも深く関わりがある御仁なのだろうね」「でも、深く関わりがある御仁なら私やデミウルゴス・・・階層守護者が知らないのは可笑しいわよ」

再びうくん、と4人で考えていると彼らと同じ階層守護者と墳墓の主までやって来た。

「お前達、こんな端で唸って何をしているんだ」

モモンガ・・・現在の名を『アインズ・ウール・ゴウン』。ナザリック地下大墳墓の主、アンデッド種族の最高峰であるオーバーロードである。

『コキュートス』、ナザリック第五階層「氷河」の守護を任された階層守護者。巨大な二足歩行の昆虫に悪魔的な印象を混ぜ合わせた姿をしており、常に冷気を纏わせたライトブルー体に、体表や尾全体に鋭いスパイクが付いている。

「これはアインズ様。実は我々の見知らぬ御旗が飾られておりましたので、思考を巡らせていた所で御座います。コキュートス、キミは――」

デミウルゴスがコキュートスに問い掛けようとした途端、そのコキュートスから殺気が溢れ冷気もより強くなっていた。

「デミウルゴス、ソレハ本気デ言ツテイルノカ・・・！」

「こ、コキュートス!?!と、とにかく落ち着きたまえ!?!キミは何か知っているのかね?」

「知ツテイルモ何モ、『至高の御方』ノ御一人ダゾ!無礼ニモ程ガアルゾ!」

「!!「ええっ!?!」」

コキュートスの言葉を聞いたデミウルゴス達は4人共同じ反応を

していた。それを見たアインズは慌てて止めに入る。

「お、落ち着くのだコキユートス!? デミウルゴス達が知らないのは理由がある! だから静まれ!」

「モ、申シ御座イマセンアインズ様。ツイ熱クナツテシマイマシタ」

「お前が熱くなるのも分かる・・・と言うか、この旗の人物を知っているのはコキユートスだけではなく、ある種族だけ。逆を言うとその種族以外に聞いても誰も分からないであろうな」

「アインズ様。その種族とは何なんですか?」

きよとんとした顔でアウラが問い掛ける。他の3人も同じ眼差しをアインズへ向ける。

「その種族は・・・昆虫種だ」

「昆虫種・・・だ、だからコキユートスさんだけは知ってたんですね」  
「ですが、何故昆虫種だけが?」

「もつともな疑問だな。それは、ナザリックに属している昆虫種全てがあの人の手が加えられているからだろう。故に記憶に残っているのだろうか」

主の話に驚きを隠せなかった4人は驚愕の表情をする。

「な、ナザリック全ての昆虫種を、ですか!」

「し、しかし・・・アインズ様、それほどの御方の事を私達は存じ上げていないのですか?」

「それは・・・彼女の夢の為、我がギルドを脱退したからだろう。先に言っておくぞ! 決して不満があったから出て行ったわけではないからな!」

「夢・・・というのは?」

「自分の理想郷を作る・・・と言っていたな。そして理想郷を作ってしまうのだから、凄い人だよ。あの人は」

ふふ、と昔の光景を思い出し笑みを零すアインズ。

「あ、アインズ様。そ、その御方のお名前は何と申すのですか?」

「ふむ・・・ここはコキユートスから言ってもらおうとしよう。その方が説得力があるからな」

そう言いながらコキユートスを横目で見て言うように促す。コ

キュートスは頷き、誇らしくその人の名を告げる。

「全テノ昆虫種ノ母デアリ、全テノ昆虫種ノ頂点ニ座スル御方……名ヲ、『ファイアー』様ダ」

「陛下、先程からぐるぐる回っているがどうしたんだい？」

コキュートスが誇らしく告げていたその昆虫種の母は、最上階の広間をぐるぐると回っていた。動揺している様にも見えるし、何かに怖がっている様にも見える。そして何かを察したセシリアは行動に移す。

「ああ。マルティナ……陛下と話したい事があるから少し2人つきりにさせてもらえるかしら」

「うん？まあ、分かったよセシ姉。行くよ、トウーレ」

セシリアの言う事を素直に聞き入れ、マルティナはトウーレと共に広間を後にした。2人が部屋を出て離れた事を確認し、我等が母に問い掛ける。

「さて、陛下——いや、【母さん】。まさかと思うけれど、アルシエの下の双子ちゃんに『女王』の姿で会うのが怖いーとかだったりするの



かしら?」

セシリアの問い掛けるが終わると同時にファイアーの動きが止まり、ギギギと機械の音が鳴るのではないかと思わせる位ゆっくりと首をセシリアへ向ける。そして発した言葉は――

「・・・そうだよ!怖いよ!嫌われないか怖がられないか不安でいっぱいだよ!アルシエはワーカーとして働いてた経験があったから今は大丈夫だけど7歳位の女の子からしたら私は巨大な蜘蛛の化け物!平然とする小さな女の子なんていないよ!ああ整理が追い付かないよお」

「おお・・・いつもより早口で長いセリフ」

【白百合の銃士 セシリア】:白百合をモチーフにして生まれた子であり、銃士隊の隊長を勤めている子だ。穏やかな性格で剣の腕は銃士トップクラス、ではあるが戦いはあまり好まなく可能なら対話で解決したい子である。この子はダークフェイスと同時期に作り上げた子で“長女”的な立ち位置をしており、数少ないファイアーの素の姿を知っているNPCだ。

「だとしても、いつかは姿を見せなきゃいけないのよ?時間が経つてから明かされるより、初めに明かした方が良いと私は思うわよ」

「・・・それは、分かってるわ。分かってはいるのだけど・・・ああ、大丈夫かしら」

「アルシエの妹ちゃん達なんだから大丈夫だと思うわよ?そりや流石に初めは驚いたり怖がったりするかもしれないけど、母さんの優しさに触れれば心を開くと思うわよ」

「・・・それもそうね、ごめんセシリア。私らしくない所を見せたわね」  
気持ちが悪く落ち着いたファイアーはセシリアへ謝罪の言葉をかける。それに対しセシリアは口には手を添えフフ、と笑みを零す。

「気にしなくて良いわよ、母さん。むしろ他の子にも知って欲しいくらいなもの、今の母さん」

「それはダメ、こういうのは少数だけが知ってるのが丁度良いのよ」

「そういうもの?」

「そういうものよ」

ファイアーはそう言いながらセシリアの頭を撫で、セシリアは気持ち良さそうに目を細める。すると扉からノックが聞こえ、話を聞くとキャノンビーモンから通信がありアルシエの姿を確認したとの事。

「さて、セシリア・・・愛おしい娘達を出迎えに行くぞ」

「ふふ、それでこそ母さんよ」

ファイアーとセシリアは大樹の根本の入口へ向かい歩み始める、鎖が解かれ自由の身になった愛娘達を出迎える為に

## 第9話 女王の不安 双子の期待

「・・・なるほど。情報収集と現地の人間の強さの調査をしていたんですね、御二人は」

「うん、そういうこと。あの時は騙してごめんね？ボク達も生きる為にこの世界の情報が必要だったんだ」

「龍馬が謝る必要ないぞ。生きる為にやったことだ、自然なことだ」  
「だとしても、こうして顔を合わせてるんだから、言わなきゃいけないことは言わないと」

街を出ようとした私達姉妹は、街の出入口で顔見知りの2人に出会った。私達フォーサイトにあの大樹の情報を教えてくれたアイテムショップ“海援隊”だ。この2人は母様の命令で近くにあったあの街で情報収集と現地の人間の強さの調査をしていたのだ、そしてフォーサイトはその計画にまんまと嵌った。

今は坂本龍馬さん、お竜さんと一緒に母様の居る大樹を目指していた。

「ねえ、新しいお母さんってどんな人なの？」

妹の1人、クーデリカが私に問いかけてくる。そういえば詳しくは話してなかった。

「母様はね、とても優しくて子供の事を第一に考えてくれる御方よ」  
私はクーデリカの頭を撫でながら答える。するともう1人の妹のウレイリカが羨ましそうにしていたから、ウレイリカも撫でてあげる。

「まあ、ファイアーは人間じゃないけどな」

ふよふよと浮かびながら私達の前にひよこつと現れしれつと凄いくことを言うお竜さん。

「お母さん、人じゃないの？」

妹達2人揃って首を傾げながら訊ねてくる。うう、何て説明すれば・・・と私が悩んでいると

「うん、僕達の主は人じゃない。蜘蛛人なんだ」  
アラクノイド

2人に近寄り視線を合わせて坂本さんが説明を始めていた。

「でもね、アルシエちゃんが言った通りとても優しい御方だよ。種族差別も無いし、ちゃんと愛を持って接してくれるよ……見た目は驚くとは思うけれどね」

最後の方は苦笑いしてしまっている坂本さん。うん、姉である私も驚くだけじゃすまなかつたもん。

「そうなんだあ。でもお姉様や2人が大丈夫って言うなら、信じる！」  
「私も信じるっ」

2人仲良く手を繋ぎながら私達に向けて元気に返事をする妹達。  
坂本さんを見ると少し驚いた様な表情をしていた。

「いやはや、アラクノイド蜘蛛人って時点で怖がると思っただけ……肝が据わっているなあ」

あはは、と苦笑いしながら頬を掻く坂本さんにそれを見てクスクスと笑うお竜さん。ふふ、この様子ならお母様を見ても気絶とかはしなさそう。私はそう思いながら森を目指し歩いて行く。

森の入り口付近でヘッケラン達と合流して大樹を目指す。3人はお母様から此処で私達姉妹とお母様の部下が来るのを待つように命じられたらしい、そして坂本さんとお竜さんを見た時は「ああ！あの時の!？」と驚いていた。その時の顔は3人には悪いが笑ってしまった。世間話をしながら進んで行くと神秘的な大樹が見えてきて、その根元付近に何人かが立っているのが分かる。その中に女王の……アラクノイド蜘蛛人の姿をしたお母様も見えた。

大樹の根元に辿り着くと、最初に坂本さんが口を開いた。

「陛下。御命令に従い、調査及びアルシエ姉妹の護衛完了致しました」  
「うむ、任務ご苦労じゃ。部屋に褒美を用意してある故、暫し休むが良  
い」

坂本さんの報告に対し、お母様は労いの言葉をかける。そして……お母様の目線が坂本さんからクーデリカとウレイリカ、私の双子の妹達へ向けられる。お母様は2人が乗っている荷台に近づき、少ししやがみ視線の高さをなるべく低くされる。

「お主達が、アルシエの妹の双子じゃな？妾はこの大樹「メガコロニー」の主であり、お主達の新たな母……ダークフェイス・グレドー

ラじゃ」

―良し、今の所変な事は言っていないし言動も悪くないはず。遠くから私の姿が見えてたとはいえ2人からは恐怖の感情は無い・・・よね!?自己紹介の後に大泣きされたら、いくら女王だからってかなり凹むよ!?ああ、お願い泣かないでっ―

なんて、自己紹介後に高速詠唱の如く頭の中で悪い癖が発動する。私が頭の中で勝手にパニックになっていると、私の意識を現実に戻したのは双子の鳴き声ではなく

「は、初めましてお母さんっ。私はクーデリカですっ」

「私はウレイリカですっ」

「これからよろしくお願いしますっ」

2人の元気の良い挨拶だった・・・え?

「お、お主達・・・妾が怖くないのか?人間でないのだぞ?」

「おじさんから聞きました!」

「優しく愛してくれるって言ってたよ!」

「だから、大丈夫って信じることにしたのっ!」

「お、おじさん・・・」

荷台で元気に答える双子にちよつとショックを受けている坂本。いやいや待ちなさい待ちなさい

「わ、妾の事を・・・話していたのか?」

「え、ええ。言い出しはお竜さんでしたけど、軽く説明くらいは必要と  
思っています」

―私、これでも色々覚悟してたんだけどなあ。まあ龍馬の性格を考えたら、そりや多少は情報を伝えて当然かな・・・笑いを堪えてるセシリアには糸玉を飛ばしておこう―

ビシッ

「痛っ!」

完全に油断していたセシリアのこめかみに糸玉を命中させ、セシリアは額を抑えぶるぶると震える。セシリアの部下の子達はオロオロしながらも心配し、他の子達はそのセシリアを見て笑っている。

「ゴホン・・・そうか。見ての通り姿形は人間とは異なっておるが、楽

しければ笑い、悲しければ泣く。そこは変わらぬ・・・そして、妾はお主達が望む限り愛し続けようぞ」

私は優しく微笑みながら双子の頭を優しく撫でる。すると気持ちいいのか目を細め笑みを浮かべる双子・・・可愛い！

「さて、お前達も疲れたであろう。中へ入り疲れを癒すが良い」

私は子供達にアルシエ姉妹の荷物の運搬と設置を命じた。

「さあ、クーデリカ。頭の泡を流すから目を閉じ耳を手で塞ぐんだ」

「ウレイリカ、少し我慢してね？」

「はーい！」

「ふふ、元気な声じゃ」

「わあ・・・母様、肌すべすべ。何か秘訣とかあるの？」

「特にこだわっていることは何もないぞ？」

現在私達は地下第3階層の大浴場に来ており、双子達は牡丹姉妹に洗われ私はアルシエに洗ってもらっている。無論今の私は人の姿だ。

「嘘っ・・・っていうか、マルティナ姉さんやトゥーレ姉さん、セシリア姉さん達も肌綺麗」

私の背中や腕を洗いながら他の子達も見比べ感想を述べる。ちなみに、あの子達人型種族バイオロイドは植物ベースの肉体をしている為、裸体でも身体の所々に自身の花が生えている。

「ふふ、心掛けていることなら教えてあげますよ。アルシエ」

湯船に浸かりながら私達の様子を見ていたセシリアが笑みを浮かべながら声をかける。それを聞き「やった」と喜ぶアルシエ。

「良かったな、アルシエ。しかし、これで漸く一息つけるのお」

洗ってもらっているのに私は腕を前や上に伸びをする。その拍子に胸が揺れ、横にいたアルシエは顔を赤くした。

「くく、愛い子じゃ」

その反応が可愛く思い、泡の手を桶で落としてアルシエの頭を撫でる。まだ恥ずかしいのか目を逸らしたまま背中や脇を洗い続けるアルシエ。洗い終えた私達はセシリアが入っていた湯船に浸かった。双子は変わらず牡丹姉妹と一緒にいる、懐くの早いわねあの子達。

「さて・・・先程も申したが、これで一息つけるのだが。アルシエ、そしてイミーナ、強いてはフォーサイトに聞きたい事がある」

私が個人ではなくチームとして聞きたいと言ったせいか、2人の表情が険しいものになってしまった。しまった、大した・・・いや、かなり重要なことだけだね？命まではいかないからさ。

「そう強ばるな、聞きたい事と言うのは2つ。1つ目は「メガコロニー」、具体的に言うとな妾の子達をどう思う？全てが人外、言うなれば魔物だ。恐怖など無いか？」

2人共思っていたのと違う質問がきたせいか、一瞬キョトンとした。最初に答えたのはイミーナだ。

「確かに此処に住んでるのは人外ばかりだけど、恐怖は初めの侵入した時位で今は何とも思わないですよ。陛下が私達を敵じゃない、と伝えてくれているおかげです」

この大浴場がある地下第3階層まで、転移を使わず第1階層から地下第3階層をツアーの様に軽く説明しながら向かっていた際に色々な子達が挨拶しに私の元へ来ていた。その時の事を思い出しているのだろう。ちなみに、第1階層でフォーサイトを襲った子とも出会っ

た。名はハイディング・キラリーフ。

「私も、初めは怖かったけど・・・今は何とも思わない」

と、私の眼を見ながら微笑むアルシエ。

「ふふ、そうか。それを聞けて安心したぞ。2つ目は答え次第では聞かぬつもりでいたからの。で、その2つ目じゃが・・・人を辞め、こちら側へ来る気は無いか？」

私はアルシエの前で両手を左右に開き、問い掛ける・・・そのまま  
でいるか、魔物になるかの選択を。



## 第10話 女王と2人の後輩

「そ、それは・・・人を辞めて、魔物になれって事？」

私の問い掛けに驚きと不安が混じりあつた様な顔を向けるアルシエ。まあ、いきなりそんな事言われて即答できる訳ないわよね。

「簡単に言うならそうじゃ。先に言うておくが、拒んだからと言って妾が向ける愛は変わらぬ、そこは安心せい」

不安が見えたので女帝のオーラを出しながら、優しく頭を撫でる。

「イミーナよ、そなたらどうじゃ？」

「ううくん・・・流星に即決は、難しいわねえ」

「先程申した通り拒んだからとて何もせん、ただの提案じゃ。妾もそなたらも利益がある。お前達は今以上、即ち人を越えた力を得る事が出来る。妾は戦力強化、そして愛おしい子らの成長を見られる。まあ、人のままを選んでも此処で鍛錬を積めば強くなれるじやろうて」

クスクス、と口を手で隠し笑う私。そう、どっちの道を選んだとしても此処で鍛錬を積めばこの世界で上位の力を持つ人間にはなれるはずだ。そういえば、この世界で上位の人間の情報が足りないわね。「今すぐ答えを出せとは言わぬ。それに今は辞めておき、別の機会に申すでも構わぬしな」

「・・・うん、分かりました」

こうして、家族団欒のお風呂タイムが終了した。

「お母さんっ、こつちこつち！」

「こつちに美味しいお菓子屋さんがあるんだよっ！」

「分かった分かった、菓子屋も妾も逃げはせぬ。慌てる必要は無いぞ」  
私は元気な2人に手を引かれながらお勧めのお菓子屋を目指している。もちろんアルシエもいる。私達は今この子達が育った国、【バハルス帝国】にきている。以前はこの子達の家周辺や路地裏しか見えてなかったから、こうしてちゃんと街を見る事が出来なかったから新鮮だ。

何故私がこの国に来ているのか？答えは単純なもので、フォーサイトはこの国では名の知れたワーカーだ、そのワーカーが姿を消したとなれば大小問わずいつか調査を行なう筈だ。恐らくアルシエ達が森の方角へ向かったのを見た者もいる、となると【メガコロニー】が見つかるのも時間の問題になり最悪大きな戦闘に発展しかねない。そうさせないために定期的にフォーサイトのメンバーの姿を見せておく必要があった・・・という訳で私はこの子達を連れ【バハルス帝国】に来ている、という事だ。

もちろん、私の護衛をする子も連れてきているが、私達を気遣って距離を取って対応してくれている。相変わらず良い子達だ。

何て考え事を終えて現実に意識を戻してみると、周りのひそひそ話も聞こえるようになった。

—おい、見ろよあの人。めっちゃ美人じゃね？—

—綺麗過ぎて今まで美人と思ってた人が普通に思えてきた—

—美しいわあ、何処の貴族様かしら？—

—きつと高位の貴族に違いないわよ—

「いやいや、そんな大貴族様だったら自分で来ないでしょー

ーつてか、3人の子持ち!?あの美しさで!?!」

「あれ、良く見たらフオーサイトの魔力系魔法詠唱者じゃないか? 一体どういう関係なんだー

など、様々な話声が・・・正直・・・。

「(すつつつごく照れる恥ずかしい!!!)」

「そりや自分の分身とも言えるキャラだもん、可能な限り綺麗に可愛く・美しく作りたいじゃん!まあ、綺麗なキャラクター制作なんて私より課金しまくっている人の方がクオリティ高いんだけどねえ

「お母さん、どうしたの?」

「具合悪い?走りすぎちゃったかな」

「ん・・・?ああ、何でもないぞ。ウレイリカ、クーデリカ。さあ、案内を続けてくれ」

優しく語りかけると双子は笑顔になり「うんっ」と元気良く返事を返してきた。

「うんうん、子供はこれくらい元気じゃなきゃねー

と、愛しの娘達の笑顔を見ながら思っていると前方から興奮寄りの声が聞こえてきた。

「せ、先輩っ!」

「ん・・・誰じゃ、あの小僧らは」

そこに居たのは片方の目を眼帯で覆っていて、パツと見暗い雰囲気をした少年だ。その少年は視線を曲げることなくこちらへ向けている。もう1人はおっとりとした雰囲気をした少女だ、その子は少年の隣に立っていた。先輩って言ってたけど・・・あ、もしかして。

「ジエツト、ネメル!」

「ですよねえー

「母様、あの子達は私が学院にいた時の後輩。良い子達なの」

私の疑問に対して、アルシエが答えてくれた。へえ、学院時代の後輩かあ・・・懐かしいなあ、学校。まあ碌な思い出は無いんだけどねえ、家やお金や身体目当てはつかだったし。少し虚無っていると立って

いた2人が私達の前に来ていた。

「先輩、お久しぶりです。元気そうで良かったです」

「先輩の家が売却済みって看板が立ってて驚きましたよっ」

「ごめんね、2人共。色々あって」

そう言いながら私をちらつと見るアルシエ。そして・・・表には出ないようになっている様だが、私を警戒しているジエツトと呼ばれる少年。

―あれ、初対面の筈よね。なんでこんなに警戒されてるのかしら・・・なんか視線が私に向けられてるといいうか、私の周囲に向けられている様な気が・・・って、まさか！―

私はスキルを使用し、少年を調べさせてもらった。すると眼帯の下には『魔眼』を宿していた。恐らく全てではないにしろ、私が人間ではない事はバレていると考えた方がよい。この世界のスキルや魔眼は油断できないわね。

「なるほど、アルシエの後輩であったか。道端で話すのもなんじゃ、何処か店にでも入るとしよう」

「ええ、お菓子屋さんへ」

むくつと頬を膨らませてせがむウレイリカ、クーデリカ。流石双子、息ぴったりね。

「忘れておらぬよ。アルシエ、すまぬがその子らと先に店に入ってくれぬか？ 妾は菓子を買うてから合流する」

私はアルシエに金貨を数枚渡し、双子と一緒にお菓子屋へ向かった。

「ということだから、先に落ち着ける場所へ行こつか・・・って、どうかした？」

「き、金貨を軽く手渡した・・・」

「先輩・・・ほんと。あの人は一体・・・」

「は、話すから・・・でも、これだけは言える。悪い人ではないよ」

こうして3人はアルシエが良く利用していた『歌う林檎亭』へ向かうことにした。

アルシエ達と別れ、お菓子屋に着いた時に私はある事を思い出し

た。

「あ。アルシエが向かった店、分からぬではないか」

分からない、というのは実は嘘であり本音である。あの子が身に付けているネックレスは完全な場所の把握はできないが大まかな場所なら分かる代物だ。故に近づいたら後は自力で探す必要が出てくる。それ自体は私にとっては簡単な事だが、あの少年の眼もある。この世界では簡単にできない芸当の可能性がある故、そういった行動は街中等ではなるべく控えるべきだ。と、いう訳で私の護衛役の子に願いまする事にした。手を軽くパンっ、と叩き

「【リリミ】、【ララミ】」

私が呼ぶと、私の影から2つの人物が飛び出してきた。いきなりの登場に驚いたウレイリカとクーデリカはビクっとし私の後ろへ隠れる。

「大丈夫じゃ、2人とも。この子らは妾の護衛をしている子じゃ」

私の影から出てきた子達は、アルシエより少し背が大きく、紫と黒を基調としたドレスを身に纏っている。正式名称は「ダイアフルドルリリミ」【ダイアフルドルララミ】、男女の双子の自律可動人形だ。念の為もう一度、男女の双子だ。決して私に男の子に女装させる趣味があるわけではない。

「お呼びかしら、お母様」

「お呼びかな、お母さん」

「うむ。そなたら、アルシエの向かった店を探し発見次第妾に報告、その後アルシエと合流するのじゃ」

「た、多分【歌う林檎亭】っていうお店かも！」

「ありがとう、お嬢様。ええ、任せて」

「ありがとう、お嬢。うん、任せて」

2人は軽くお辞儀をしそのお店を探しに向かった。

「さてと、では菓子を買うとするか」

「——という訳で、私達はあの人……母様の養子になったの」  
アルシエはメガコロニーやそれ等に関することを省き、話が繋がるように2人に話した。

『森内のモンスター討伐依頼中に両親が暗殺され、戻ったらあの惨劇。借金が自分に移行し、自分や妹達以外の家や高価な家具には思入れは無い為売却。借金が無くなったのは良いが行く宛てが無かった時にあの人と出会い今に至る』、と

話を聞いたネメルはハンカチで目元を拭き、ジエツトは理解はしたが完全には納得していないといった表情を浮かべていた。

「納得、いかない？ジエツト」

「……あんな人、いたら帝国で知らない人なんて居ないはずですから。素性が知れない、と言いますか」

「ジエツトから見たらそうかもしれない。でも私達は無理やり養子になったわけじゃなく、自分の意思で決めたって事は知っていて欲しい」

「まあ、先輩がそう言うなら」

「お嬢様見くつけた」

「お嬢見くつけた」

丁度話が落ち着いた時に、不意に私達以外の声が2つ聞こえた。驚

きながら振り向くと紫と黒のドレスの様な服を着た人形の様な子達が立っていた。誰なのか聞こうとしたが、首から下げていたネックレスの形が「メガコロニー」のものだった為、母様の子供なのだろう。「もしかして、母様の？」

「ピンポンピンポン！」

「大正解。お母さんから、店の場所を探して報告をお願いされた」

そう言うと、男の子？は耳に手を当てる仕草をしていた。恐らく母様に連絡をしているのだろう。女の子は自然な動きで私の左側の席に腰を下ろし、連絡を終えたであろう子は私の右側に腰を下ろした。

「私は【ダイアフルドール リリミ】、そっちは【ダイアフルドール ララミ】。よろしくね、お嬢様」

「よろしくね、お嬢」

「よろしくね、2人とも」

アルシエ達はリリミとララミを加え、世間話をし始めた。暫くするとファイアーと双子が『歌う林檎亭』に到着した。

「さて、この店にいると思うのだが」

「あ母さん、あっちあっち！」

「お姉様」

私は双子に引つ張られアルシエのいる席にたどり着いた。

「待たせてすまぬな、目移りしてしもうて中々決められなかったようだな」

私は微笑みながら双子の頭を撫でる。撫でられた2人は気持ち良さそうに眼を細め「えへへ」と笑っていた。私達が来るのを配慮し、大人数向けの席を用意してくれたおかげでリリミとララミが居ても全然問題なかった・・・のだが、真面目なこの子達は『じゃあ私達は影に入って護衛の続きをするわね』『うん、続きをしなきゃ』と言って私の影に戻ってしまった。その時双子以外の3人はまあ、驚いていた。アルシエに話を聞くと、取り敢えず話は落ち着いたらしい。そこで私はこの子達と親睦を深めたく思い、食事をしながら話をする事にした。もちろん私の奢りで。

初めは遠慮していたが、アルシエと双子の口添えもあり了承してく

れて親睦会を始めることになった。

世間話や質問の受け答えをしていると、店内に夕日が差し込んできた。思った以上に長話をしてしまったようだ。気付けば静かだった店内が賑わい始めていた。仕事終わりの者達がやってきたようだ、するといかにもガラの悪そうなグループが店内に入ってきた。

「ああ？なんだよ満席じゃねえか」

「マジかよお、ここで5軒目だぜ」

「・・・お前ら、終わってんならさっさとどけろ。痛い思いしたくねえだろ」

グループの1人はほぼ食事を終えかけていた私達のテーブルに目をつけ、威圧してきた・・・何故か首からかけているプレートを見せつけながら。とりあえず私は無視して子供達にデザートを勧める事にした。

「お前達、食後のデザートは決めたか？遠慮する事はないぞ」

そう言うの後輩2人は『何言ってるの!?!』と言いたそうな顔をし、アルシエは私にはなく男に対して同じ顔をしており、双子は目を輝かせて私を見上げる。無視された男は怒ったのか、声を荒げる。

「てめえ、クソ女<sup>アマ</sup>あ！無視してんじゃねえぞ、痛い目見てえのか！」

「・・・貴様、先程からギャーギャー喚きおって。大人しく待つ事も出来ぬのか・・・いや、実力差も測れぬ愚か者じゃったなあ、出来なくて当然か。よくそのランクになれたものだ」

私は敢えて煽る様に言い返してやり、取り出した扇子で口元を隠しクスクス笑った。男共が集まってまた下賤な言葉が来ると思ったら、意外な人物から声が上がった。

「お母さんはそんなのじゃないよ！」

「とつても綺麗で優しいお母さんだよ！」

双子達が自分達より強く大きい男共に言い返していた・・・ちよつと感動した。

「口答えしてんじゃねえぞクソガキい！」

男は苛立ちがブーストされたのか、腕を大きく振りかぶり双子のどちらかへぶつける体勢に入っていた。双子は互いに抱き合い目を瞑



り、後輩2人は顔を逸らし、アルシエは双子を守ろうと席から立ち上がった。しかし、男の拳が双子に届くことは無かった。目を瞑り、逸らしていた子達が男を見ると驚きの光景が広がっていた。

「怒り」は確かに、戦士の力の源となる。じゃが、囚われすぎれば見失う。妾に対する戯言であれば手を出さないでおこうと思うたが、妾の愛おしい子供に対して暴言、暴力。母として、女王として、子に対する無礼。そして、妾の前に立ちながら余所見をした罰じゃ」私は相手の顔面を片手で掴み持ち上げた。いわゆる『アイアンクロー』と言うやつだ。思わず《女帝のオーラ》を使ってしまった、そのせいか仲間らしき男共は青ざめていた、掴まれた男は痛いのか両手で私の指を外そうとするがビクともしない。周りの客達も驚きで目を見開いていたり口を大きく開けていた。

「言葉には言葉を。力には力を！」

私は男から手を離すと同時に、身体をくるっと回し男の鳩尾に回し蹴りをぶち込んでやった。

この時のオーラと蹴りで、これから厄介事に巻き込まれる事になるのを、当時の私は知る余地も無かった。

男はそのまま店の壁まで吹っ飛び穴が空いた。仲間達は口を開けたまま吹っ飛んでった男の方を見つめていた。

「貴様らも、同じ運命を辿るか？」

再び《女帝のオーラ》を出し、仕上げの圧をかける。すると男共は血相を変えて吹っ飛んだ仲間を回収し店を出ていった。私はフツ、と一息つくと見ていた客達から歓声が上がった。流石に気を抜いた瞬間だったからビックリした。

―スゲエぜ、姐さん！―

―いいやあ、良いもん見せてもらったぜ！―

―アイツらいつも似たような事してんだ。いやあ、スッキリした。ありがたいな！―

等等など、感謝の言葉が多く投げられた。周りの客もアイツらに対し

て鬱憤が溜まっていたらしい。まあ……発散出来たなら、いつか。

あ……良くない事があった。

「……店主よ」

「あ、ああ。なんだ？」

「そう身構えずとも良い……まずは謝罪を。妾が加減出来なかった故に壁を破壊してしもうた、すまぬ」

私が壊した事には変わりないので、まずは謝罪をした。すると店主は予想してなかったのか、キョトンとした表情をしていた。

「して、質問なのだが。壁の修理費用はいくら位かの？」

「修理費？まあ、金貨2枚あれば足りるくらいだが……」

「そうか。では迷惑料も兼ねて……受け取るが良い、店主よ」

私は金貨3枚をカウンターに置いた。店主は驚き返そうとするが、私は店主の前に手を出し微笑みかけながら首を左右に振った。店主は返すのを素直に諦め「ありがたく受け取らせて貰うよ」と笑って言ってみせた。

私の行動に何か刺激されたのかまた歓声が上がった。

「さて、すまぬなお前達。食事を続けようか」

私は優しく微笑みかけ、食事……デザートを食べすことにした。

食事を終えた私達は店を出て、別れようと帰路に進もうとした時にジエツトに裾を掴まれた。

「ん、なんじゃ？」

「その、すみませんでした。俺、貴女の事を疑っていました。でも、あの冒険者に対しての言動で疑いが晴れました……先輩を、妹達を、どうか幸せにして下さいっ」

ジエツトが頭を下げると同時にネメルも頭を下げて来た。私は2人の頭を優しく撫でる。

—ああ この子達もなんて良い子なのだろうか—

「ふふ、当然じゃ。妾はあの子らを愛し続けると誓おう」

私は言い終えた後先に歩いていった愛おしい子達の後を追うように歩き始めた。少し歩いた所でネメルが思い出したように大きな声を出して問い掛けてきた。

「あ、あの！お名前は、なんといいのですか〜！」

普段こんな大きな声を出さないのだろう、顔を赤くし肩で呼吸をしていた。私は彼女達の方を向き、微笑みながらも女王としての威厳を保ちながら答える。

「妾は、グレドローラ。ダークフェイス・グレドローラ。この名、お主らの心に然と刻むが良い」

## 第11話 階層守護者、集結

私達は「バハルス帝国」から「メガコロニー」へ帰宅した際にダークフェイスからかけられた言葉は、おかえりなさいの類だけでは終わらなかった。そのかけられた言葉は幸せだと感じていた心を現実に引き戻させる程強力なものだった。

「おかえりなさいませ、陛下。帰宅早々申し訳ありませんが、直ぐ陛下に聞いて頂きたい事が」

「出迎えご苦労じや、ダークフェイス。ほお？お前がそんな事を言う程のことかえ？」

「はっ！陛下が外出されてから帰宅される迄、ほぼ同地点で2度の『超位魔法』の発動を確認致しましたっ！」

——はっ？——

「・・・なん、じゃと？」

私は最上階に子供達と共に転移し、玉座へ向かいながらダークフェイスの報告を聞く。

「発動の確認後、対応は遅れましたがステルス・ミリピード部隊を向かわせ偵察・監視を行ない、戦闘が終了と同時に【メガコロニー】へ帰還しております」

【ステルス・ミリピード】：戦闘能力はほぼ最低値であるが、その代わりに隠密行動に特化した子だ。疲労状態、魔力が3割を切ると自身と同じ縦列に居る相手の動きを完全に封じる【自動発動能力<sup>バッシブスキル</sup>】ある。

私は玉座に座りダークフェイスへ問う。

「ふむ・・・それで？」

「帰還したステルス・ミリピードの映像をご覧下さい、陛下。マルティナ」

「それがこの映像だよ、陛下」

マルティナが仮想デスクトップの様なものをカタカタし終えると、トゥーレが抱えていた映像虫が映像を映し始めた。そこに映っていたのは——深紅の鎧を纏った羽の生えた女性と、フードとマントで身体は分らないが、顔は見る事ができた。それは、骸骨だった。

かつて所属していたギルドの、そしてそのギルドに入るきつかけになった人物が映し出されていた。双方が戦闘を開始した音は聞こえるが、私は放心状態にあった。此処に転移して、自分の事で精一杯で、多少は有り得たかもしれないが方に一つも無いと切り捨てて過ぎてきた。その方に一つの可能性が存在している・・・こういう時、人間は案外冷静なのかもしれない。あ、今はもう人間じゃなくて<sup>アラクイド</sup>蜘蛛人だったね。

なんて考えていると戦闘は終了していて、『超位魔法』2回は初めてトドメに使用していたらしい。子供達は私の判断を聞く為にこちらを向き言葉を待っていた。それに対し私は——

「くくく・・・あゝはっはっはっはっ!!!」

目元を手で隠し、大声で笑った。この時だけは『グレドローラ』としてではなく、『私』として笑っていた。私がこんなに大声で笑った所を初めて見た為、アルシエ達を含めポカンと口を開けていた。

「へ、陛下・・・？」

「お母さん？」

可愛い双子が私を見上げ声をかけてくれる、それに私は微笑みながら優しく撫でる。

「ふふ、なんでもないぞお前達・・・ダークフェイス、セシリア」

「ハッ！」

「各階層守護者に此処へ1時間後に来る様に知らせよ、集会を始めるぞ」

「ふむ・・・このドレスも似合うが、こちらも捨て難い」

「か、母様。これはその、背中が」

「お姉様、綺麗〜」

「お姉様、似合ってるよ〜」

今私達は集会用の衣装を選んでいる所だ。双子達はお気に入りを早々に見つけ装飾品を選んで終わり、イミーナは自分に合うのを分かっている為選び終えていた。アルシエは迷っていたので私も選ぶのを手伝った・・・のだが、素材が良い為私が迷ってしまった、今に至る。ちなみに男性陣はダークフェイスが担当している。

「これくらいが丁度良い。もしかしたら以前より高位な者達と席を共

にするやも知れぬ、今の内に慣れておくのじゃ」

「う、確かに・・・そ、そうだ。母様はドレス、着ないの？」

アルシエのドレスを決め、次はドレスに合う髪型にする為アルシエの髪を梳う。

「妾はこのままで良い、それに呼んだ子らが来た際にはあちらの姿になるしの」

「各階層のトップを集めてるんだもんね、本来の姿になるのも当然ね」  
「そういう事じゃ」

そしてアルシエ達のドレスアップが終了し、再び最上階へ戻る事にした。すると男性陣は先に終わっていたらしく、ダークフェイスの隣で立って待っていた。

ウレイリカ、クーデリカのドレスはトップがぴたつと身体のラインにフィットしており、スカートはすそ広がりになっている。

アルシエのドレスは、トップは双子達と同じだが種類の違うものだ。それはスカートだ、アルシエのスカートは前が短く、後ろが長くなっているデザイン。そして私の好みで背中が空いているドレスにした。

イミーナは身体のラインに沿ったパーティードレスだ。

男性陣はそのまま、女性陣はセシリアの隣に立ち、各階層守護者が来るのを待つ事にした。その間にイミーナのドレス姿に釘付けのヘッケラン・そのヘッケランを見てやれやれと呆れるロバーデイク・セシリアや牡丹姉妹に抱きしめられたり撫でられるアルシエ姉妹。

——場が場じゃなかったら私もあの子達に混ざってギュつとしたい——

なんて己の欲を抑えていると、入り口や転移門<sup>ゲート</sup>で私の子供達・・・階層守護者達が集まり始めていた。ちなみにこの最上階は入って来る者に合わせて広がる為、大きい子が来ても大丈夫の様になっている。様々な子達が来る度にフォーサイト・双子はそれぞれ驚いていたりビクつとしていた。

そして全ての階層守護者達が揃った・・・うんうん、皆カッコいい可愛い！

「陛下、各階層守護者集結致しました……。それではみな、女王陛下に忠誠の儀を」

「第1階層守護者【リコリスの銃士 ヴェラ】」

「同じく第1階層守護者【リコリスの銃士 サウル】」

「陛下の前に参上仕る」

双子の守護者、ヴェラとサウル。「情熱」の花言葉を持つ彼岸花から生まれた人型種族バイオロイドがヴェラ。誠実かつ情熱的な性格で、周囲の信頼を一身に集めている。

サウルはその真逆で無愛想な性格、周囲の誤解を受けやすく、諍いを起こす事があるが、その度にヴェラが仲裁を行なっている。友人全員間違えていたが、女の子である。所謂イケメン女子。

「第2階層守護者【フレッシュアの蟲惑魔】ママの呼び掛けにより参りましたわ」

フレッシュアの蟲惑魔。ピンクを基調とした華美ながらも露出度の高い美少女で、浮遊する巨大かつ毒々しい花の中心にモデル座りをしていた。『人の不幸は蜜の味』を表した様な性格をしており、侵入者をありとあらゆる『落とし穴』に落とし、それを見る事で快感を得ている。家族内での立ち位置はちよつと我儘な妹ポジションをしており、この前はダークフェイスをからかい追いかけられてる時に『落とし穴』に落としていた。

「第3階層守護者【マシニング・スパークヘラクレス】陛下ノ命ニヨリ参リマシタ」

マシニング・スパークヘラクレス。ヘラクレスオオカブトをモデルに造り上げた機械インセクト。マシニング部隊の総司令であり、メガコロニーの防衛責任者。力無き者・齒向かう者を嫌い、武力を持って制圧する。仲間に対しては力無き者を優先的に守り、時折兄貴肌な所を見せる。

「第4階層守護者【ザミエールモン】陛下の前に参上致しました」

ザミエールモン。【木精軍団将軍】の地位にあり、軍団には草原や樹海などの土地と同化しカモフラージュできる、妖精型や植物型などのデジモンを多く所有している。冷静沈着に事を進ませ、奇襲戦、挟撃



戦、掃討戦、陽動戦、電撃戦、ゲリラ戦など、いかなる作戦も思いのままに軍を動かし敵を殲滅する事を得意とする。

「第5階層守護者【ブルムロードモン】参上仕る」

ブルムロードモン。植物が甲冑を纏った妖精型デジモンで、自然を守るために戦う心優しい騎士。どんな悪天候も晴天に変える能力を持ち、屋外では常に有利な戦場を作り出す事ができる。優しくも厳しいお兄ちゃんポジション。

「第6階層守護者【闇のコヤンスカヤ】御指名頂きましたので、参上致しましたわ」

闇のコヤンスカヤ。「厳格服従な野生」をポリシーとし、妖艶に人間を手玉に取る魅惑の美女。強いものを挫いて従え、弱きものを庇護するという「獣の群れの女王」。コヤンスカヤの本質である「人類が迫害に使ったもの・人類に迫害されたもの」のうち、「人類に迫害されたもの」を司る。人類に虐殺された動物たちの訴えの集合体である。メガコロニー内では食料生産ラインの責任者であり、常に最高品質の食物を生産している。第6階層はメガコロニー内で唯一【動物】が生息する階層だ・・・まあ、ただの動物じゃないけどね。

「・・・。第7階層守護者【妃蜘蛛 きさぎくも ヤツカダキ】参りましたわ」

妃蜘蛛ヤツカダキ。今は赤と黒のドレスを身に纏っているクール系の女性。名を言うのに時間がかかったのは、本来は大型の蜘蛛の魔物である為話す事が出来ない。故にヤツカダキの子であるツケヒバキに爪先に『人化の指輪』を付けて貰い、人の姿になった。

本来の姿の時は肉食性で極めて凶暴、そして高い知能を持ち、戦闘力も非常に高い。4本の歩脚や暗紫色の外殻の一部から先端が鉤状に曲がった大きな棘が生えており、この「鉤棘」に自分の腹部から産出した糸を引っ掛けるようにして巻き付け、全身を包み込む習性を持つ。炎系の魔法も使用でき、火力特化型だ。

「・・・。第8階層守護者【闇蠟螂 かくとうろう アトラル・カ】お母さんの願いの為、来たよ」

闇蠟螂アトラル・カ。ヤツカダキより背は小さく、こちらは子供らしい黄色を主にしたドレスを身に纏っている。この子は自分の糸で

爪先に指輪を付け人の姿になっている。よく蟲惑魔達と遊ぶ姿を見かける。

本来の姿は全身が神秘的な美しさを醸し出す黄金色の外殻に紫色の眼をしており、ハナカマキリの様に平たい体をしている。こちらも高い知能・戦闘力を有しており、建造物や兵器といった類を自らの巢を構成するパーツとして扱う。本来は自身のライフの減少に沿って戦闘パターンが変わるのだが、ランダムに行なうようにちよつといじった。

「第9階層守護者【エンシエントビートモン】陛下ノ御前ニ」

エンシエントビートモン。雷属性を司る古代昆虫型の子である。カブトムシやクワガタムシなど多くの昆虫を合わせた様な姿をしており、超硬度な外殻を持ち、鎌状の両腕はあらゆる物を切断し、自らの質量の何百倍の物を軽々と持ち上げるパワーを持つ。敵と判断した者には厄災とも言える力で打ち滅ぼす。

「第10階層守護者【戦神 ミッドウエー】プレジデントの命により、この天才が参りましたよ」

戦神ミッドウエー。海戦の名を持つ魔王にして、非論理的な事を嫌う自称・頭脳派キャラ。普段は小さいマスケットのような「省エネモード」、別名「チビウエー」の姿で過ごしている。天才（自称）故に自身の頭の良さを鼻にかけた発言が多いが、あくまでその優れた頭脳が発揮されるのは「戦略」とその他少々のみ・・・そう、所謂ポンコツっ娘だ。

しかし、それは戦闘外での話。戦闘時では従えている巨大な機械獣、グレイゴーストを使役し天才の名に恥じない戦いをする。省エネモード時は彼女が掴まる浮き輪となっている。

様々な軍艦の残骸から生まれた存在で、そのままでも十分強力なのだが、ミッドウエーの持つスキル【灰色の亡霊】グレイゴーストにより更に強大な力を得ることが可能。

このスキルは第1階層〜第10階層、及び地下第1階層〜地下第3階層までの侵入者による被害・倒された子達、メガコロニー内で起

こつた戦乱・悲劇、それらを【全て】吸収し力に変える事が可能。

即ち、メガコロニー内で侵入者が暴れば暴れる程ミッドウエーの力が増すと言う事だ。

「地下第1階層守護者【グランデイスクワガーマン】陛下ノ前ニ」

グランデイスクワガーマン。グランクワガーマンの強者の中で更に極稀に進化に成功した唯一の子である。戦闘に特化した為一部脚が退化したが、前脚・後脚が発達し人型に近づく進化をした。ダークフェイス同様グレドローの子であることを誇りに持ち、常に敵には情け容赦なく、女王陛下の子として恥じぬ戦いを心掛けている。

「地下、第2、階層守護者、【タイラントカブテリモン】陛下ノ、前ニ  
タイラントカブテリモン。あらゆる昆虫型デジモンを意のままに操ることができ（一部を除く）、自身が戦うことはほとんどない。体の紫色の甲殻は高密度の金属にも負けない超硬度を誇る。好戦的な性格ではないが、戦闘になると敵を殲滅するまで逃がさない。

「地下第3階層守護者【光のコヤンスカヤ】御指名頂きましたので、参りました」

光のコヤンスカヤ。「自由奔放な野性」をポリシーとし、妖艶に人間を手玉に取る魅惑の美女。コヤンスカヤの本質である「人類が迫害に使ったもの・人類に迫害されたもの」のうち、「人類が迫害に使ったもの」を司る。第3階層守護者のマシニング・スパークヘラクレスと新兵器の相談や製造を行なっている。メガコロニー内では、地下第3階層の全施設の責任者を担当しており、利用する方全員に満足してもらえようように動いている。

「妖精・植物種統括【白百合の銃士 セシリア】女王陛下の前に参上仕る」

白百合の銃士セシリア。メガコロニー種族責任者の1人。百合の花言葉「純潔」「荘厳」を体現するかの如く、美しく気高い花の子。

剣・特に細剣での戦いを得意とするけど、あらゆる武器の扱いに精通している。銃はもちろん魔法も扱う事が出来る・・・まあ、本職ではないからそこまで高い位階魔法は使えない。だけど、<sup>リバース</sup>「牙」化や私と同じで時<sup>ストライドシエネレーション</sup>空超越を使う事ができる。

「メガコロニー最強の戦士、蟲種統括【威圧怪人 ダークフェイス】偉大なる女王陛下の前に」

威圧怪人ダークフェイス。メガコロニー種族責任者の1人。クワガタをモチーフに造られた子であり、私が最初に造ったNPCだ。彼の発言は自信過剰ではなく、本当のことである・・・まあ、過去の設定をそのまま入れただけなんだけどね。本来【ダークフェイス】という名は私しか使って無く、メガコロニーの中で最も強い個体に授けられたものだとか。完全な戦闘・火力特化型でこの子も時<sup>ストライドシエネレーション</sup>空超越を使う事ができる。

「サーヴァント、及び他種統括【坂本龍馬】陛下の御前に参上仕る」

坂本龍馬。日本人なら一度は聞いた事がある名前であろう。まあ、設定はゲームから持ってきたものだけど・・・。北辰一刀流と呼ばれる流派の達人であるが争いごとを好まない根っからのお人好しで、少しとぼけた雰囲気ではあるが温和かつ気さくで話しやすい性格。かなり交渉上手で個人的な見返りより大局的な見返りを重視する良くてきた子だ。既婚者であり、妻のお竜と基本的に行動を共にしている。

「全階層守護者、女王陛下の前に参上致しました」

「我等が偉大なりし女王陛下、何なりと御命令下さい」

自慢の愛し子達が自己紹介をし終え、私へバトンを渡す。そして私は女王として、母として・・・妖美な笑みを浮かべ

「良くぞ集まってくれた、妻の愛しい子供達よ」

と、労いの言葉をかける。さて、これから忙しくなりそうね。

## 第12話 誕生【百害姫（イビルファイリア）】

「さて、集まってもらったのは他でも無い。妾が離れている間に発動したと言う【超位魔法】についてじゃ」

言い終わると同時に私は本来の姿になる。こつちに來てから殆どの子と会ってなかったから「おお」と感嘆の声が上がる。

「知っている者も居るだろうが、あれは【失墜する天空<sup>フォールンダウン</sup>】・・・第10位階を超えた魔法の1つじゃ」

私の子達は頷いているが、フォーサイトは驚愕の顔をしていた。まあ、この世界の基準だと疑いたくもなるわね。

「そして、その魔法を放ったあのローブを纏った骸骨・・・彼奴は昔、妾が所属していたギルドのギルドマスターじゃ」

今度は守護者達が驚愕していた。そういえばモモンガ、ダンジョン内とか私のこだわりは見てたり聞いたりしてたけど、性能に関しては【イベントで当たった時の楽しみにしたいんですよ】と言って守護者達は極力見ないようにしてたっけ。

「妾と同じく、この世界に居るかもしれぬという可能性はあったが限りなく低いと思っておったから考えずにいたが・・・いやはや、誠愉快な話じゃ」

口元を手で隠しくく、と笑みを零す。すると手を挙げるフレシア。「何じゃ、フレシア」

「じゃあ、ママはそのギルドマスターさんに会いに行くおつもりなのかしら？」

他の子達も気になっていたのか、頷いていた。本来なら合流して情報共有した方が良いんだけど・・・。

「いや、行くつもりは無い。あの戦い、彼奴は自分のギルドの階層守護者と戦っていた。故に彼奴が妾の知る彼奴であると言う事に確証が持てぬ。仮に知る者であったとしても味方になるかはまた別の話だ、目的が違えばいつかは衝突するからの」

「とはいえ。戦を仕掛けるにしても此方もかなりの戦力を出さなければいけませんし、私達の死を御母様が黙認するとも思えません。だか

らと言って放置は愚策ですわね・・・可能であれば拠点を見つけ監視をしたいと思います」

光のコヤンスカヤが自分の意見を述べる。それに対しマシニング・スパークヘラクレスが反応する。

「拠点ヲ見ツケル、逆ヲ言エバ相手ニ我等ノ存在ヲ見ツケラレル可能性ガアル。ソレダケハ避ケネバナラヌ」

「ですから、『可能であれば』と言ったじゃないですか」

「なら、それ等に関する情報の収集に力を入れるべきじゃないか？」

「・・・うん、私もヴェエラ姉の意見に賛成」

「じゃあ人の国に潜伏？」

私の子達があればやこれやと意見を言い合っている。うんうん、自分の意見を言うのは良い事だ。とは言え、この子達の言う事も事実・場所を把握したい気持ちはあるけど逆に見つけられると色々と厄介な事になる。

「・・・守護者とその配下の者を『冒険者』にさせこの世の情報を集めさせよ。主にバハルス帝国や周辺国家、又は歴史を。問題は『誰』を冒険者に送り出すかなのじゃが」

私は守護者達に視線を移す。あからさまに視線を逸らすもの・行きたいのか眼を輝かせる者・私の命令に従いますと言った眼をする者と別れていた。その中で私が指名したのは――

「アトラル・カ、頼まれてくれぬか？」

「ふふ、頼まれた私はお母さんをお願いを快く引き受けます。私の配下の子も連れて行くから『人化の指輪』を下さいな？」

「うむ、後でお前に渡そう。それとキャノンビーモン達を収容せよ、彼奴が居ると分かった以上直ぐに見つけられてしまうからの。今後はステルス・ミリピード及びステルス機能・光学迷彩等を持つマシニング部隊に任命する。ヘラクレス、部隊の編成は任せる」

「ハッ、畏マリマシタ」

「さて、今の所はこんなものか・・・。それと、もう知っておると思うが。妾の新たな娘、長女の『アルシエ』と双子の次女『クーデリカ』、『ウレイリカ』じゃ。みな、仲良くするのじゃぞ」

私は玉座から立ち上がり愛娘達の傍に寄り守護者達へ紹介する。そして3人は一歩前が出る。

「・・・先日、正式に母様の娘になったアルシエと言いますっ。そして双子の妹のクーデリカとウレイリカ。まだまだ分からない事だらけの若輩者ですがよろしくお願いしますっ」

「よろしくお願いしますっ」

アルシエの挨拶に続くように双子も挨拶をし頭を下げる。少しの間した後、守護者達から拍手と歓迎の聲が送られてきた。この様子なら問題無さそうね。

「では、今回の集会はこれで終了とす——」

「か、母様っ」

私の声を遮る様に発した言葉が聞こえ、その声の主はアルシエだった。ダークフェイスが「陛下の御言葉を遮るとはっ」と言いたげな顔をしていたが私が制し宥める。

「どうした、アルシエ？何か言い忘れた事があったか？」

私は目線を合わせ優しく声をかける。するとアルシエは覚悟を決めたような表情をしており、発した言葉は此処にいる全員を驚かせた。

「母様・・・私を、母様と同じに——『魔物』にして下さいっ！」

「!!?!?!」

以前お風呂で提案した話、『アルシエ、並びにフォーサイトの魔物化』計画。聞いた時は動揺していたのには本気の眼をしており、当時間聞いていたセシリア達はもちろん、知らない・聞いていないフォーサイト2人と守護者達も動揺していた。

「アルシエ、答えは急がず良いと話したであろう？それに話をしてから数日しか経っておらぬぞ？——それとも、その眼にさせる程の何かきっかけでもできたかえ？」

「・・・店での出来事と、守護者の皆さんを見て、です」

「店での、出来事？」

「はい・・・あの時私は妹達を庇う事しか考えてなかったけど、力があれば守る事ができたし、そして守護者の皆さんを『視て』嫌でも力の

差を感じてしまったから」

チラツと守護者達を見るアルシエ。もしかしてこの子達に合わせ  
たから判断急いじやったのかな・・・でも、眼は本気そのものだし。

「・・・本当に良いのだな？受け入れたら二度と『人間』には戻れぬぞ」

【母】としてだと甘さが出ちゃうから【女帝】としてアルシエに問い  
掛ける。そしてアルシエはそれに怯む事無く、真っ直ぐ私の眼を見て  
「はいっ、母様っー」

と、言い放った——

「・・・宜しい。ならば愛し子の願い、この母が叶えてやろう・・・こ  
れより儀式リチュアルを行なう」

私が宣言すると、守護者達がざわめき始めた——まあ、するのは  
初めてだもんねえ。女性で虫好きの友人なんていなかったし。

フォーサイト及び双子はキョトンとしていた。

「儀式リチュアル・・・儀式と言っても生贄だの魔法陣は使用せぬ。妾のは至っ  
てシンプルじゃ」

私は左手の爪先で右手の人差し指の腹を軽く刺し、血を出す。あ、  
血は赤いままなんだ私。

「妾の血を飲む。ただそれだけじゃ」

私はアルシエの方へ少し血の出た指を向ける。するとダークフェ  
イスが右腕の鋏をアルシエへ向け言い放つ。

「お前の様な小娘が、我らが女王の血を取り込みただで済むと思っ  
ているのか！血、即ち陛下の魔力が混じっているということ！それを体  
内に入れ、その貧弱な身体が耐えられると思っているのなら陛下への  
侮辱となるぞっ！」

その台詞によりアルシエはショックを受けてしまった・・・が

「訳すると『陛下の強大な魔力が混じってる血を飲んで身体が耐えら  
れる可能性が低いから、鍛錬を積んでからでも良いんじゃないか』つ  
て言ってるわ」

と、セシリアがフォローを入れる。ダークフェイスったら、シンプ  
ルにアルシエが心配だったのね。すると慌てるダークフェイス。

「なな、何を言っているセシリア!?!このオレ様がそんな事言う訳ない



だろう！」

「だから、訳してあげたんじやない。大丈夫よアルシエ、心配してただけだから」

そう言いながらアルシエを優しく撫でるセシリア。ダークフェイスは「ふんつ、言っている」と顔を逸らす。素直じやないなあダークフェイス。

「くくく・・・安心せい。無論アルシエの身体が耐えられる様に調整しておる。まあ、他種族を同族にするのは妾も初めてだからな。ダークフェイスが心配するのも領ける」

「えっ。母様、初めてなの？」

ダークフェイスが慌てふためいるのをよそに、驚きだったのか問い掛けてくるアルシエ。

「うむ。虫属は同性には不人気じやったからな・・・つと、話が逸れたな。ではアルシエ、妾の血を飲むのじや」

「・・・」

アルシエはゆっくり私の指に口を近づけ・・・血を飲んだ。

「急がずとも良い、ゆっくり、落ち着いて飲むのじや」

優しく頭を撫でながらアルシエを落ち着かせる。アルシエは私の眼を見てコクツと頷き飲み続ける。時間にして10秒弱、私の血を飲んでアルシエは私の頷きと共に指から口を離す。トロンとした表情をしていたが、数秒後には目を見開き表情を強ばらせる。

「あ・・・ああ・・・くあつ・・・ああつ!？」

自分で自分を抱き締め身悶えるアルシエ・・・そろそろね。

「暗黒繭」  
クレイドル

私は両手の指先から糸を出しアルシエを包み込む。私がスキルをアルシエに使った為フォーサイトや双子から不安そうな表情が見られる。

「詳細は省くが、包んだ相手を無力化させるスキルじや。これを解くにはこの繭の防御力を超える斬撃・・・もしくは炎系魔法を使用する事。そして・・・妾と『同じ存在』である事じや」

フォーサイト・双子は理解が追い付いてないのかキョトンとしてい

だが・・・流石は天才、ミッドウエーは最初に気付いた。

「プレジデント！まさかアルシエを」

「くく、流石自称天才じゃな。もう分かったか」

「自称じゃありませんー！」

と、ミッドウエーをからかっているのと繭の隙間から薄緑の光が零れ  
—— ゆっくりと繭が解けていく。そして現れたのはーアルシエで  
ある事はもちろんだが、異なる部分が多数あった。

1つ目は、目元。私の目元に赤い縦ラインがあるのだが、それがアルシエにもあった。それと私に似た為か、つり目っぽい感じがする。

2つ目は髪。金髪の艶やかな髪だが、肩口辺りまでだったのが腰まで伸びており毛先数cmが私と一緒に紫になっていた。

そして、1番変化があった3つ目・・・それはアルシエの  
両脇腹<sup>第1</sup>背中<sup>第1</sup>寄り付近<sup>第2</sup>にあつた<sup>助骨</sup>。彼女の腕と同じ太さ・長さの私の下半  
身の蜘蛛脚と同じものが生えていた。左右に2本ずつ。

眼を開いたアルシエは私を確認にし腕を伸ばす、すると右脇腹に生えた脚2本も一緒に動いた。違和感があつたのか、脇を見ると普段の自分には無いものがあり混乱し始めたアルシエ。

——ああく無意識に動いちゃう感じのあれね。私も慣れるのに苦労したなあ——

なんて、思い出に浸っている場合ではない。私は落ち着かせる為に声を掛けようとしたら、先に双子達が声を掛けていた。

「お姉様、綺麗〜」

「お姉様、小さいお母さんみたい〜」

アルシエの脇腹に生えた新たな脚を握り、姉を見上げる。それで落ち着いたのか頑張つて残っている脚で双子の頭を撫でようとするアルシエ・・・だが、プルプルと震えるだけで撫でる事はできなかった。私は可愛いと思いつながらアルシエに近づき頭を撫でる・・・そして守護者達の方を共に向き

「妾の愛おしい子供達よ、喝采せよっ！この瞬間、【メガコロニー】の歴史に新たなページが紡がれたのだ！この子こそ、妾の次に『女王』になる者・・・【百害姫アルシエ・ダークフェイス】じゃー！」

と高々に宣言した。言い終わると同時に拍手喝采大歓声がこのフロアを満たした。身辺警護の子達もオーバリアクションと思うくらい身体を動かしていたり拍手をしていた。

確かラテン語で姫を『フィーリア』と言うので、それを使わせてもらった。ドイツ語はあの骸骨と被るから敢えて避けた。万が一会った時、アルシエが名乗った時に変な目で見られないようにする為だ。

「百害イビル……姫フィーリア……ダークフェイス？」

「このメガコロニーの姫と言う意味と、選ばれた者しか得られぬ名だ……ふふ、これからの成長が楽しみじゃ」

優しく微笑みながら説明し、アルシエは元気良く「はいっ」と答える。

—さて、今回する事は終わったし。今度こそ終了ね—

と、私が終了と伝えようとした瞬間、待つてましたと言わんばかりに私の声を遮られた。

「おやおやあ、私わたくしを仲間外れにするなんて酷いですわ。御母様」

声の主は玉座の間の天井から聞こえた。そちらを向くと天井の一部が歪んでいる様になっており、そこから1人の女の子が現れた。

「今回の集会の対象は『階層守護者』じゃ。間違つてなからう？」

「キヒヒ、御母様は意地悪なものですから」

黒髪で左右非対称のツインテール、深緑と黒を基調とし肩・胸元・背中が大きく出ているデザインドレスを身に纏っている。眼は虹彩異色オッドアイで、右が赤・左が金色で時計の文字盤となっており、針までしっかりと動いている。彼女は空中からゆっくりと玉座の間の中心へ降り立ち、スカートの裾をつまみ優雅に挨拶をする。アルシエと双子は、恐らくあの娘の美しさにポカンとした表情をしていた——凝つて創つた甲斐があった！

「初めまして、ですわね。私の名は『ナイトメア』、親愛なる御母様の切り札の1つにして原初ゼロスを司る者。私とも仲良くして頂きたいですわ」

ナイトメアは姉妹達に優しく微笑みかける。すると姉妹達も頭を下げ返事をする。

「こ、こちらこそよろしくお願ひしますっ！ナイトメア姉様」

「よろしくお願ひしますっ、ナイトメア御姉様」

「ふふ、素直で可愛い子なら大歓迎ですわ」

『ナイトメア』・ゼロスエレメンタル原初の精霊と言う精霊種の最上位種族。全ての属性の魔法が使用可能で各属性を司る六大竜『ゼロストラゴン原初の竜』を私以外で唯一使役出来る子だ。元ギルメンでさえ教えていない私にとっておきだ。

「ナイトメア、時が来た際には頼むぞ」

「はい、もちろんです。可愛い妹達を護る為なら、存分に私の力を使つて下さいまし」

「色々挟んでしまったが、これで集会を終了とする。妾の愛おしい子供達よ、己が責務を全うするのじゃ」

私は言い終えると、転移し自室へ戻った。

ファイアーが転移した後、階層守護者達の動きは様々だった。そのまま自分の階層へ戻る者・お喋りをする者・アルシエ達の元へ向かう者の三通りだ。

「・・・アルシエ。体調はどうですか？具合悪くありませんか？」

初めに声をかけたのはヤツカダキだ。ベースが同じ【蜘蛛】である為、アルシエも何となく親近感が湧いていた。

「ヤツカダキ姉様。はい、今の所大丈夫です・・・新しく増えた腕？脚？の扱いが出来てないだけです」

「御母様も意地悪な事をなさいますわねえ。可愛い娘を蜘蛛人にして、そのままお部屋に戻ってしまうのですから」

アルシエを後ろからぎゅっとしながらナイトメアは愚痴を零す。

「ナイトメア、陛下の事です。何か特訓できる物を探しているのでは？」

「しかしミッドウエーよ、その様な都合の良い物があるのか？陛下も儀式をするのは初めてと申されていたぞ」

「ぐぬぬ、それは確かに・・・ですが陛下が無策とは到底思えませんっ」  
今度はミッドウエーやブルムロードモンも歩み寄って来る。アルシエの後ろにはファイアーの切り札の1つ【原初の精霊】その周りに【第10、7、5階層守護者】その光景を見たセシリアは思った。

「アルシエやクーデリカ、ウレイリカがもし泣いたら、国の1つや2つ消し飛ばわね」

「自分が他国にとつて存亡を左右するトリガーになっているとは、夢にも思っていないだろうね」アルシエちゃん」

いつの間にか隣に来ていたアトラル・カが心を読んだかのように語る。アトラル・カの台詞に苦笑いをするしかないセシリアだった。

## 第13話 フォーサイトの鍛錬

アルシエを蜘蛛人にした次の日、ファイアーはアトラル・カの守護する第8階層へ向かった。理由は『人化の指輪』を渡す為である。

アトラル・カが守護する第8階層は砂漠地帯。かつては砦として利用されていた建築物の廃墟が複数配置されており、中は低レベルの武器や木箱が置かれているのを見る限り、砦の倉庫のような場所だったと思わすような作りになっており、特に拘ったのが長年放置された演出にする為、壁や天井が崩落し、中には砂が大量に入り込んでしまっている様になっている。

などと作った時の事を思い出していると、廃墟の砦の頂上から黄色の外殻・紫色の瞳をした大型の甲虫種が姿を現した。ファイアーと視線が合うと跳躍し距離を縮め、数秒後には目の前に着地した。

この大型の甲虫種が「閻蟴アトラル・カ」だ。アトラル・カはファイアーに会えたのが嬉しいのかキシシ、と声を上げる。そんなアトラル・カが可愛く思え頭部を優しく撫でる。

「ふふ、愛い子じゃ。アトラル・カ、昨日話した通り『人化の指輪』を渡しに来たぞ。今日明日にでも部下の子と龍馬と共に出立するのじゃ。龍馬ならもう街の者と顔馴染みにもなっておるはず、冒険者登録もスムーズに行なえるであろうて・・・お主の活躍、期待しておるぞ」

聴き終えたアトラル・カは気合いの表れなのか、大きな咆哮を上げると再び廃墟へ跳躍し姿を消した。

「さて、次は・・・」

「こゝ、此処が第7階層・・・【熔岩洞】」

第7階層【熔岩洞】。火山らしく荒々しい溶岩地帯と、相反する豊かな水と緑が両立した独特な環境が特徴の階層だ。何故アルシエがこの階層に来たかと言うと、昨日の夜にファイアーから「明日の昼食後に第7階層へ参れ、鍛錬を行なう」と言われたからだ。ちなみに、フォーサイトと双子も一緒だ。

初めて見る光景にポカンとしていると、近くの穴や木影から小さい魔物が現れた。

「お姉様、あの子って確か・・・ヤツカ姉様が連れてた子だよね？」

「そうそう、ヤツカ姉様の脚に指輪付けてた子だよ」

そこに居たのは【臣蜘蛛ツケヒバキ】胴体の大部分を糸で包んでおり、まるで繭玉のような外見をしている。ツケヒバキ達はフォーサイトを見つけるとゆっくりと近付いてきた。以前の彼等なら臨戦態勢を取っていたが、今では此処の関係者、アルシエに至っては姫になっている為身構えなかった。

ツケヒバキ達は足元に到着すると、会えて嬉しいのかスリスリと足に身体を擦り付けていた。

「この子達、甘えてるのかしら？」

「はは、かもな。こうじっくり観察出来んのも、なんか不思議な感じするぜ」

「それもこれも、陛下の恩恵なのでしようね」

「ふふ、可愛い・・・ん、どうしたの？」

アルシエも足元に来たツケヒバキを撫でていると、その子がアルシエの腕を糸を巻き付けクイツクイツ、と引っぱる仕草をする。フォーサイトは「遊びたいのか?」「構って欲しいんじゃない?」など意見を述べるが・・・アルシエは直感でツケヒバキに訊ねる。

「・・・ヤツカダキ姉様の所へ連れて行ってくれるの?」

するとツケヒバキはコク、と頷く。当然、フォーサイトは驚き、双子は目を輝かせる。

「アルシエ、何で分かったんだ!？」

「えっ?何でって・・・何となく?」

「もしかして、蜘蛛人になったから・・・というか、百害姫になったから自然と分かるようになったんじゃない?」

「なるほど、それなら納得ですね」

「お姉様凄くいい!」

アルシエは照れくさそうに頬をかく。そしてフォーサイト達はツケヒバキ達の先導により、少し火山地帯よりへ向かう。

すると、ツケヒバキ達が一齐に止まりキイ、キイと鳴き声を出し始めた。ツケヒバキ達が向いている方を見ると、そこには昨日見た大型の鋏角種の魔物の姿があった。その魔物はアルシエと目が合うと跳躍し距離を詰めて来た。そして空中でくっ付いていたツケヒバキに『人化の指輪』を付けさせ、着地した時には赤と黒のドレスを身に纏った女性が現れた。

「こんにちは、皆さん。私の守護する第7階層へようこそ。この階層に御用があるのでしたら私に対応致しますよ」

スカート裾を軽く摘みながら御辞儀をするヤツカダキに対し、少し反応が遅れたが御辞儀を返す面々。

「ヤツカ姉様く」

すると、アルシエの両脇から現れたクーデリカとウレイリカ。そして自分を『姉』と認め懐いてくれている!と思いき嬉しくなるヤツカダキ。ヤツカダキは裾を摘んでいた手を離し、双子を撫でる・・・と思いきや、脇腹付近から新たな2本の腕が現れ、そちらで双子を撫でる。撫でられた2人は心地良さそうに目を細める。

「ふふ、2人は可愛いですね・・・おや、どうかしましたか?」

「ヤツカダキ姉様も本来は蜘蛛だものね・・・腕が他にもあって不自然では無い、のだけど・・・」

「こうもナチュラルに出されるとビクツとしちまうな」

「ああ、なるほど。まあ、こればかりは慣れてください」

口を隠しながら、ふふつ、と笑みを零すヤツカダキに、苦笑いを浮かべるしかないフォーサイトの面々。ヤツカダキは双子を撫でなが



ら此処に來た理由を訊ねる。

「それで、私の階層に何用で來たのかしら？」

「母様から、この階層で鍛錬をするって言われたから來たの。母様を見かけましたか？」

「母様ですか？私は見かけて——いえ、たった今この階層に到着した様ですね」

階層守護者である彼女は、侵入者の有無を探知する事ができる。故にヤツカダキもアルシエ達の方へ向かっていた為早く合流する事が出来た。ヤツカダキは空を見上げる、釣られて他の面々も見上げる。そこには両腕を胸下で組みゆつくりと下降する我等が女王、ファイアールことグレドールの姿があった。

着地し、面々を確認すると双子が居るのは想定していなかったのか、きよとんとした表情を浮かべる。

「よく來た、お前達……って、クーデリカとウレイリカも來ておったのか……まあ、良い。それより、アルシエ。その姿のまま、約1日過ごしたわけじゃが……身体はどうじゃ？」

「身体は問題は無いけど、やっぱり違和感が大きいです……1日じゃ全然慣れなかった」

そう言いながら自分の両腕を上げるアルシエ……と同時に増えた腕兼脚も証拠に上がっていた。

「じゃろうな。本来であれば母である妾が直々に教えたい所ではあるが、妾は今の姿と蟲<sup>ツァーミンロードエンプレス</sup>女帝……女王の姿の方が過ごした年月が永くてのお。そこで、今見て分かる通り、ヤツカダキが今のアルシエに近い形態と言う訳で、この階層に來てもらった……と言う訳じゃ」  
もつと繊細な扱い、となるとアトラル・カになるのだが、あの子には他の仕事がある。それに、まずは基本的な動かし方をマスターしなければアトラル・カの様な繊細な動きは不可能に近い。

「そして、ヘッケラン・イミーナ・ロバーデイク」  
名を呼ばれた3人は背筋を伸ばして私を見る。

——いや、そんな覚悟を決めた様な顔しなくて良いのに……そりゃ、アルシエ達は娘で可愛がっているが、その仲間を雑に扱ったりなんて

しない――

「ふふ、そう身構えなくても良い……身構えるのは妾ではなく、他におるからのお」

私の発言に「へっ？」と顔を傾げる。

「お主達には、別々の階層へ行き鍛錬を行なう。ヘツケランは第1階層、相手は守護者のヴェラとサウル。イミーナは第4階層、相手は同じく守護者のザミエルモン。ロバーデイクは第3階層、もちろん相手は守護者のマシニング・スパークヘラクレスじゃ」

言い終えた途端、3人の顔は真つ青に変わった。人の顔って本当に青っぽくなるのね。

「安心せい、妾から先に伝えてある。あの子達にとっては遊び程度で相手してくれるであろうて……では、行け」

私は指を鳴らすと同時に3人に転移魔法をかけ、各階層へ飛ばす。急展開に開いた口が塞がらないアルシエに「手厳しいですね」と苦笑するヤツカダキ。

「アルシエは此処でヤツカダキから指南を受けるのじゃ……つと、それとこれを」

私は一冊の本を取り出し、アルシエへ手渡す。アルシエは受け取りながら問いかける。

「母様、これは？」

「蜘蛛人について、様々な事が記されておる本だ……まあ、妾以外ではあるがな」

「何でお母さんは載ってないの？」

「お母さんが1番凄いのは何で？」

「ふふ、それはじゃな」

私はヤツカダキの元から来た2人を撫でながら答える。2人……アルシエもごくつと息を？む。

「妾の種族が、妾しか居らぬからじゃ。故に記されていないと言うわけじゃ」

「母様しかいない……という事は、母様しか知る者が居ないから書くに書けない。というか書く以前に知らない？」

「お母さん凄くいい！」

ぱちぱちと拍手する双子と、目を見開き驚くアルシエ。

—まあ、私のこれってシークレット寄りの種族だから仕方ないけどねえ。それに初級段階で私の見ても理解は出来ないと思うから、こういうのは段階を踏まないよね—

「ふふ、褒めても何も出ぬぞ。ではヤツカダキ、頼むぞ」

「畏まりました、母様」

私はアルシエの頭を撫で応援し、双子を連れてその場を後にする。当然自分達はどうか疑問になる2人。

「お母さん、私達は何するの？」

「私達も特訓？」

「ふふ、お前達が望むならやぶさかでもないが。まずは基礎を学ばなければな？2人とも別の階層へ転移するから、妾の手を離すでないぞ」

私の言葉に素直に従い、手をギュツと握る2人。うん、素直でよろしい。私は目的地を思い浮かべながら転移を行なう。そこはフォーサイト達が暮らしている屋敷がある紅葉え彩られた場所だ、階層的には闇のコヤンスカヤが守護する第6階層だ。

「よし、着いたぞ2人共」

「ん・・・あれ、此処家のある所？」

「うん、綺麗な木がいっぱいの所」

「うむ、正解じゃ。しかし、今から行くのは更に奥・・・この【谿紅葉領域】を守護している者が居る所じゃ」

私は2人と手を繋ぎながら進んで行く、するとフォーサイトが暮らしている屋敷より更に大きく、歴史を感じるような屋敷が現れた。双子はポカーンと口を開けており、それを見て私は笑みが零れた。すると、私が来たのを察知したのか1人の女性が屋敷から出てきてこちらへ歩み寄って来た。白の着物に、赤の丸模様や帯で彩っていて、赤い番傘を差していた。彼女こそ、この【谿紅葉領域】を守護している【九尾の妖狐 タマユラ】・・・キツネっ娘である。

「こんにちは、お母様。そして可愛らしい妹達。わたくしはタマユラ、

【谿紅葉領域】を守護している者です」

「ごんにちは、タマユラ姉様っ」

「ふふ、元気があってよろしいですね。それでお母様、この領域にはお散歩に来られたので？」

可愛くお辞儀をする双子の所まで来ると、私に訊ねながら双子の頭を撫でる。

「それでも良いのだが、お主に頼みがあつての」

「わたくしに頼み、ですか？身体の弱いわたくしに出来ることであれば、何なりと・・・コホツ、コホツ」

着物の袖を口元へ運び軽く咳をするタマユラ。原作設定を読んだ際【太陽のもとを歩けない程病弱】となっており、それは可哀そうと思うも、設定をガン無視はできなかった為【身体が弱い】という設定にした。

「タマユラ姉様、大丈夫？」

「お母さん、明日とかじゃダメ？」

——設定無視しとけば良かったかなあ・・・でも、こういう子が本気で戦闘する姿凄く好きなんだよねえ・・・まさか異世界に来て悩まされる事になるとは——

「大丈夫ですよ2人共、心配してくれてありがとう。それでお母様、頼みというのは？」

「あ、ああ。実のこの子達に勉学や魔法知識を付けてもらいたくてな」  
「勉学を・・・畏まりましたわ。お母様」

我が娘の1人ながら理解が早くて助かる。タマユラなら教えるのも上手だし、新しい妹達と触れ合える機会が折角来たのだ、断る理由が無い。

「では、よろしく頼むぞ。タマユラ」

「はい、お任せ下さい。お母様」

私は3人が屋敷に入るのを見届けた後、自室へ転移した。後日、タマユラから聞いた話によると、屋敷の中にタマユラの護衛役として妹の【ワカモ】が待っていたのだが、双子の妹達と一緒に入ってきた時は、一瞬思考が止まり意識が戻った時には双子を両腕で抱き締めてい

たらしい。

## 第14話 ファーストコンタクト

「ワーカー達がこちらへ向かって進んで来ている、じゃと？」

私は地下第1階層の森林広場でカブトやクワガタと戯れているとマルティナから報告が上がった。

まあ、サイズは一般的なものではなく・・・例えるなら大昔のアニメ《甲虫王者ムシキング》の森の妖精から見たサイズ感だ。つまりかなり巨大という訳だ。まあ、みんな私の子供だし、別に恐怖も悪寒も無い。むしろ甘えてきて可愛い程だ。

「ああ。時折左右に揺れてはいるけどメガコロニーの方角なのは違くないよ」

「そうか。愛おしい子供達の暇つぶしになれば良いのだが」

「もしかして、陛下が仕向けたのかい？」

「【バハルス帝国】で分かりやすく行動していたからの。まあ、それにしては時間がかかったとは思うが」

アルシエの両親の遺体はそのままにして来たし、後輩や周囲に聞こえるように敢えていつもより大きめに名乗った後に帰路に着いた。アルシエの話だと【バハルス帝国】にはかなりの手練の魔法詠唱者<sup>マジックキャスター</sup>が居るそうだ、そやつが遺体に魔法をかければ何かしら情報を得られるはずだ。

「なるほど、全ては陛下の掌の上って訳だ。じゃあ私達は迎撃せず迎え入れる用意をしておくよ」

「うむ、そのように頼む」

私はマルティナに指示を出し、近くの木の根に腰を下ろす。カブトムシ達は不思議そうに頭を傾げる。

「侵入者のルート次第では、お前達に出番があると言う事じゃ」

私は近くに居たアクティオンゾウカブトの角を撫でる。すると鼓舞されたのか、咆哮し角を空へ掲げる。

他の子達もアクティオンと同じ行動を取り始めていた。

「ふふ、やはり愛い子達じゃ。さて、妾も玉座に戻り観戦するとしよう」

―待てよ、こんなの、話聞いてねえぞ!?ただ森の奥にある大樹の調査って話だったじゃねえか!他のワーカーチームも居たはずなのに居なくなつてやがる!なあ、この木はどうなつてるんだよ!―

とあるチームは、美しくも強大な力を持つバイオロイドに斬り刻まれ。

とあるチームは、露出もあり美しい女子に魅了され、ありとあらゆる落とし穴に落とされ。

とあるチームは、見た事の無い鋼の街で、鋼の虫型の魔物に追いかけ回され。

とあるチームは、とあるチームは、とあるチームは……。

「くく、まさか此処への転移トラップを引き当てるとは。お主等、とてもなく運が良い」

私はフォーサイトの面々と侵入者の行く末を鑑賞していると、とあるチームが最上階への転移トラップに引っ掛かり、扉の前に現れた。

「こ、此処は!?って、フォーサイト!?!」

「何でお前らが此処にいらんだよ！調査チームには居なかつた筈だろ！」

「んな事はどうでもいいだろ！助けてくれフォーサイト！此処はヤバい！規格外の化け物の巣窟だ！」

辿り着いて早々何やら喚き散らかしている侵入者達。

「騒々しい連中じゃな。それに流石フォーサイト、名は知られておる様じゃな。お主ら、彼奴等と知り合いか？」

私の問いにリーダーであるヘッケランが答える。

「仲間では無いですが、時折共闘する程度です」

「知り合い以上仲間未満、と言った所か。なら殺しても良いな」

私が言い終えると即座に臨戦態勢を取るワーカー達、やれやれ……。力量差が分からぬ時点で底が知れる。アルシエ、お主の準備運動程度にはなると思うが……。殺すのは流石に抵抗があるか？」

この娘は確かに強くなった、しかし圧倒的に経験不足であり、いくら種族を蜘蛛人に変えたとは言え元人間。人殺しには些か抵抗がある筈だ。無理そうなら私がやるけど。

「……ごめんなさい、母様。倒す位ならまだやれるけど、殺すのはまだ……」

「素直に申してくれて妾は嬉しいぞ、アルシエ。では、戦闘不能にまでさせよ」

「はいっ、母様！」

返事と共に蜘蛛人化し、敵へ向かって行くアルシエ。そして人間を辞めたアルシエを見て驚愕するワーカー達。

「アルシエ、てめえ人間辞めやがったのか！」

「こうなりやてめえを人質にして、此処から出るしかねえな！行くぜお前ら！」

ワーカー達はアルシエを人質に取るつもりらしいが……。

「今のアルシエが、貴様等の知るアルシエと思うてくれるなよ？」

アルシエは指から糸を出し先頭に居た男の武器を持つ手ごと絡め取る。男は振りほどこうとするも、腕が動かない事に気付いた。

「なっ、なんだこの力は!? あんな小娘にこの俺が力で負けた!？」



そのままアルシエは腕をグイツと自身へ引き寄せ、無防備の脇に魔法を叩き込む。

ファイアーボール  
「火 球！」

直撃を食らった男は壁まで吹っ飛び、血を吐きながら咳き込む。

「こいつ、よくもっ！」

魔法を放った時、後ろに居た男が斧を振り下ろそうとした。するとアルシエは予測していたのか、視野が広がったのか、魔力の動きを察知できたのか、何を感じたのか定かではないが新たに生えた左の脚から糸を出し、男を絡め取り動きを封じる。

「遅いよ？はあああ！」

捕まえた男を力任せに振り回し、散開していた仲間の方へ投げ飛ばす。

この少しの戦闘でフォーサイト達は確信した『自分達は強くなっている』という事を。そして、戦闘しているアルシエが実感していた。

—相手の動きが止まって見える。以前じゃ考えられない、こんな事できるのはもつと上位の存在だと思ってたのに。私が今、それをしてる・・・！—

アルシエは自分の手を握り開きながら感動している様に私には見えた。ふふ、これからのこの子達の成長 が楽しみね。

少し考え事をしてしていると、アルシエから声を掛けられた。視線を向けると、新たな脚から糸を出し男達全員を拘束し、空いてる両手で火球を出し動いたら撃つ、と牽制している。

「侵入者の拘束、終わったよ」

「見事じゃ、アルシエ。さて、では糸を妾に」

私は玉座から立ち上がり、拍手と共にアルシエの傍まで歩く。その際アルシエは嬉しそうに照れていた、はい可愛い。

傍に来た私は慣れた手つきでアルシエの脚から糸を受け取る。

「この後どうするの、母様？」

「無論、此処へ仕向けた者を探り出す。まあ、大体予想は付いておるがな」

私は第3階層へ転移し、侵入者達から記憶操作を使い情報を入手す

る。

まず、ワーカー達へ調査を依頼した貴族を確認。場所を視認したので転移門<sup>ゲート</sup>を使い貴族の元へ行き即座に記憶操作。貴族に命令をした人物は予想通りの人物だった。

「くく、これで【バハルス帝国】とコンタクトが取れた。あの皇帝はどう出るかのお？」

予想通りの人物・・・それは、帝国最大の守護者と言われる『フリーダ・パラダイン』そして、この老人の提案を実行に移した皇帝。『鮮血帝シルクニフ・ルーン・フォーロード・エルⅡニクス』

「まあ、招待状はこちらから出すとしよう。さて、これが吉と出るか凶と出るか・・・どちらにせよ、この手に堕ちぬ贄は無い、がな」

☆

「カイシユウ、今手は空いておるか？」

「おや、母さんじゃないですか。私に会いに来てくれるなんて、厄介事ですかな？」

キリンジ・カイシユウ：メガコロニーの未来を想い描く政治家として作った子だ。性格は鷹揚で達観しており、物事に対して皮肉的に語る事が多い為メガコロニーの中でも好き嫌いが分かれる傾向にある。例を挙げるとダークフェイスが特にだ。

私は椅子に座りながら娘へ答える。

「本来なら否定したい所じゃが、今回は正解じゃ」

「そいつあ残念ですなあ。それで、内容は？」

「少し前に侵入者が居たのは知っておろう？それを仕向けた国、その王へ招待状を届けて欲しくてな」

私は一通の手紙を取り出し、カイシユウへ手渡す。

「私は伝書鳩じゃないんですかねえ？しかし、何故このような物を？」

「理由は2つ。1つ目はお主なら確実に此処へ来させるよう出来ると思っておるから。2つ目は娘に気分転換して欲しいからじゃ。まだ周囲や国について調査中故、容易に外出させる訳にも行かぬが、お主も疲れておろう？何か理由を付けて外の空気でも、と思うてな」

私はカイシユウを《女帝のオーラ》を出しながら撫でる。カイシユ

ウも気持ち良さそうに受けている。

「やれやれ、口が上手いのはどちらなのやら？まあ、畏まりましたよ母さん」

「共はミッドウェーに頼んでおる、お主の準備が出来次第向かっておくれ」

「メガコロニー最高峰の戦力を誇る彼女をわざわざ護衛船に？」

「予想外だったのか、目を見開きキョトンとしていた。まあ、確かに過剰っちゃ過剰である。」

「お主の疑問は領ける。だが、大事な娘を敵地へ送ろうとするのだ、護衛は強い方が良い」

「ははっ、確かにその通りですなあ。下手に下級の者を送れば捕獲されたり、メガコロニーの沽券に関わりまますからな」

「そう、下手にレベルの低い子を送れば何をされるかなど容易に想像出来る。そんな事は私はさせせない、許さない。」

「そういう事じゃ。ではカイシユウ、頼むぞ」

「畏まりました、センセ」

「全く、この天才を輸送船にするなんて母さんくらいですよ！」

私がバハルス帝国の皇帝へ母さんの招待状を届ける為にミッドウエーと向かっている。その道中、不満なのか愚痴を言うミッドウエー。

「輸送船じゃなくて護衛船だ、ミッドウエー。天才のあんたなら母さんの考えは理解出来るだろう？」

「それはもちろん分かりますよ！理解は出来ませんが同意はしないのですー！」

「やれやれ、本当は指名されて嬉しいくせにさ？・・・つと、そろそろ光学迷彩頼むよ」

「そそ、そんな事ないですよー！それと言われなくても既に展開準備は完了していますよ、天才ですから」

ミッドウエーの光学迷彩を展開し、バハルス帝国への侵入し「帝都アーウインタール」へと向かう。その道中、街の様子を観察する。

「へえ、中々活気があるようじゃないか。下に降りて詳しく調査していくくらいだ」

「確かに、言われてみればそう見えますね。瞳が明るい、とでも言えば良いでしょうか」

「ああ、自分達の生活が良くなると信じているって言う目だ・・・まあ、これからは皇帝の行動によって生死が決まるわけだが」

「ま、私の様に天才じゃないのですから選択を誤るのも仕方ありませんね。それはそうとカイシユウ、そろそろ着きますよ」

ミッドウエーの声で前を向くと目的地が更に良く見えてきた。こりやまた立派なドーム状だこと。

「んじゃ、母さんのお使いを始めるとしようかね」

☆

「何、ワーカー達が全滅？」

どよめくフロア、対策を考える貴族達、そして落ち着いて思考を巡らせる皇帝・・・シルクニフ・ルーン・フォーロード・エルニクス。

「という事は、グレドローラとやらの戦力はかなり高いと考えた方が良さそうだな。問題は本人の力なのか、それとも配下の力なのか不明な所か」

「本人じゃないですかね？店で軽くしか見れなかったですが、見た目に反して中々の戦闘力の持ち主ですよ、彼女は」

皇帝の疑問に前者を勧めるバジウツド。

「本人か・・・仮にそうだとしたら、化け物に変わりは無いか。爺よ、バカ貴族の首一つで済むように手は打ってあるな？」

「もちろんで御座います。この場に居る者しかおらぬ話は知りません」

「ならば良し。念の為——」

皇帝が言葉を紡ごうとしたその時、大きな振動が皇帝達を襲う。

「なんだ!?!いったい何事だ!?!」

「陛下! 敵襲です!! 相手は正体不明の浮遊物に乗った女2人! 中庭に降り立っています!」

「な、女が!?!」

皇帝と四騎士、そして貴族達は中庭の見えるベランダへ移動し確認する。すると本当に兵士の言う通り見た事の無い浮遊物に2人の女。

「ロイヤル・エア・ガード皇室空護兵団は何をしていたのだ!?!」

「パラダイン様、あの浮遊物を見た事が御座いますか?」

「いや、見た事が無い・・・金属で出来ている様にも見えるが、生きている様にも見える」

様子を窺っていると、浮遊物から赤い見慣れない服を纏った女性だけが降り立った。

「皇帝陛下、御避難を」

「ふんっ、逃げて何処へ行く。何処が安全だと言うのだ?」

「し、しかし・・・」

「そんじゃ、御集まりの方々。私の声が聞こえるね?」

兵士の避難誘導を、断る皇帝。そして降り立った女性が周りに声をかける。

「私は百害女王ダークフェイス・グレドローラ陛下の娘の1人、キリンジ

「カイシユウと言う者だ。私が此処に来たのは、この国の皇帝が私らの家『メガコロニー』に不届き者を送つて来たからさ。無罪を主張しようとしても無駄さ、ワーカーの記憶から雇い主、その雇い主の記憶からその古いぼれを陛下は確認しているからなあ?」

彼女は大きな筆の様な物を取り出し、フルルダへと向ける。

「そして、私はこの手紙を皇帝陛下へ渡して来る様をお願いされたから来たって訳さ。さあ、皇帝は出てきておくれ?」

懐から封筒を取り出し、周りに見えるように空へ掲げる。皇帝は別の者に受け取らせようと考えたが、その考えを見透かした様に彼女は言葉を紡ぐ。

「先に言っておくが、偽者が受け取ったらそいつが『皇帝』と判断するから気を付けな?陛下は嘘が嫌いだねえ?もし別の所でそいつじゃない者が『皇帝』として振る舞っていたら、嘘と見なして……くく、何をしてくるか考えただけで恐ろしい」

つまり、『本物が受け取らなければ、後々災いをくれてやる』と言っているという事だ。

「……私が皇帝、ジルクニフ・ルーン・フォーロード・エルニクスだ。その手紙、謹んで受け取ろう」

「出てきたか……ミッドウエー、あれで間違いないね?」

「ええ、間違いありません。皇帝本人です」

カイシユウと名乗る女性は謎の浮遊物に乗りながら、小声でもう一人の女性と相談をする。そして演説をした女性の高さが皇帝と同じになり、女性は手紙を渡す。

「では、『皇帝』?確かに渡しましたよ。後から受け取ってないだの読んでないだのはよしておくれよ?」

「もちろんだ。貴女方を見送った後、読ませて頂こう」

カイシユウと名乗る女性は手紙を渡すと、浮遊物が更に上昇し……消えた。

探知系魔法で周囲を搜索し、居ない事を確認した皇帝は先程の部屋に戻り手紙を読む事にした。手紙の内容は、要約すると

『貴方が送り込んできた人間は、私の子供達の暇つぶし程度にはなっ

だが、私個人としては盗人の如く侵入し家を荒らされた事に怒りを覚えて  
いる。3日以内に謝罪に来るのであれば追求はしない、来ないの  
であれば本意では無いが貴方の国を地図から消す事になる。地図を  
添えてあるからそれを頼りにする様に。その地図は3日後に自動的  
に消滅し、見た者の記憶から消える様に細工してある。では、貴殿の  
賢明な判断に期待する』

と、記されていた。

「・・・爺、私は相手を侮っていた。私自身がメガコロニーに赴き、釈  
明する必要があるようだ」

## 第15話 百害女王と鮮血帝1

—翌日—

「ほお？もう来たのか。3日後に来ると思うておったが、皇帝殿は判断力に優れておるようじゃの」

私は書齋で龍馬が集めた書物に目を通してしているとセシリアから報告が上がってきた。偵察用に放っていたブレイドクワガモンから、通信があり『帝国ヨリ、馬車及び騎馬ガ出立。方角ハメガコロニー』と。

「その様ね、陛下。出迎えは誰にお願いするの？」

「そうじゃのお・・・」

—今日の天気は曇り、か。なら—

「門前にアクティオンとギラファを配置。出迎えは銃士隊及びブルムロードモンに任命する」

「畏まりました、陛下」

「陛下、陛下・・・そろそろ起きて下さいますか？」



「ん・・・ふわあ。昼寝なんて本当に久しぶりだ、子供の頃以来か。グレドローラへの最初の感謝は昼寝だな」

バハルス帝国皇帝、メガコロニーへ移動中。急いで支度をしていた為移動中が唯一落ち着ける時だった。

「ああ。確かに陛下つて、いつもせかせか何かしてますよね？何でなんですか？」

「ふっ、全て『鮮血帝』と言う奴が悪い」

その問いを聞いたバジウツドは少し口角を上げ

「と言う事はつまり、自分のせいだと？」

と敢えて煽る様に尋ねる。ジルクニフも不敬と言わずいつもの会話の様に返答する。

「まあな？改革を早足でやったせいで、色々なものが追い付いていないのだ。なあ？ヴァミリネン」

「ええ。貴族達を大量に粛清しましたからね、何処も人手不足で大変です」

「ふふ、本当に頭の悪い男だ・・・しかし、何時までも私がせかせかと仕事をしていては次代の皇帝に恨まれてしまうからな」

『次代皇帝』ですか」

「陛下は正妃をどちらから迎えようと考えられているのですかな？」

フルーダの自然な質問だが、ジルクニフは苦虫を噛み潰したような表情をする。

「・・・内か外で言うなら、外になるが。王国のラナーも、竜王国のドラウディロンも私の嫌いな女1位と2位だ・・・勘弁してくれ」

一般より重めの世間話が終わると、外からノックがした。外で警護していたレイナスだ。彼女からの報告だと『メガコロニー』と思われる幻想的な大樹の周囲に大型の昆虫型の魔物2体に妖精と人間を足した様な女性達が出迎えていると。

「人間大の妖精、だと？」

「陛下、これより赴く場所は未知の世界と思われます。もし何かありましたら私の元まで直ぐに駆けて下さい」

「それは、いざとなったら空間転移で逃げる。と言う意味か？」

ジルクニフの鋭い眼差しに怯みもせず肯定するフルーダ。

「さて、グレドローラの胎。見せてもらおうじゃないか」

ジルクニフ一行は何事も無く『メガコロニー』の元へ到達する事が出来た。そして入り口付近で待っていたのは報告に上がった通り、大型の昆虫の魔物2体・妖精を連想させる女性達だった。そしてその女性達のリーダーと思われる赤い花を纏った女性が腕を広げながら歓迎の言葉を紡ぐ。

「やあ、バハルス帝国皇帝。ジルクニフ・ルーン・フォーロード・エルⅡニクス殿。貴方達を歓迎する様に陛下より任せられた『牡丹の銃士マルティナ』と」

「その妹『牡丹の銃士トウレ』と申しますわ」

「貴女達のような美しい女性を付けてくれたダークフェイス・グレドローラ殿に心よりの感謝を」

ジルクニフは感謝の言葉を述べ、笑顔で対応する。だが、その笑顔もこれから起きる事で消える事になる。

「ですが、折角皇帝陛下がいらして下さいましたのに天気がよろしくない・・・ので、まずはそちらから」

「頼むよ、ブルム兄!」

「ブルム兄・・・?」

マルティナと名乗った女性が門へ向かって手を向ける。それに釣られジルクニフ達も門の方へ視線を向ける。そちらからはカチャ、カチャ、と甲冑を着た者の足音が聞こえた。遠目では分からなかったが音が近付くにつれ姿が見え、ジルクニフは驚愕する。

「しよ、植物のモンスターが甲冑を着ている!?!」

その甲冑を着た『ブルム兄』と呼ばれた存在はマルティナとトウレの間で歩みを止め、お辞儀をする。

「お初にお目にかかる。ジルクニフ・ルーン・フォーロード・エルⅡニクス皇帝。私は第5階層守護者、名を『ブルムロードモン』と申す。以後お見知り置きを。さて、では早速本題に入らせて頂く」

ブルムロードモンは右手に持つ槍先を空へ向け、小さな光の光線を放つ。その光線は空へと消え――一瞬にして曇り空が快晴に変

わった。

「な、何これ・・・暖かくなったような」

「なっ!?」一体何が起こったのだ、爺!」

「天候操作は第6位階の魔法ですが、これはより上位の魔法と思われ  
ます!これは凄い!」

「ハハハ、喜んで頂けるのは嬉しく思うが。残念ながらこれは魔法では無く、私の常時発動型特殊技術<sup>パッシブスキル</sup>でね。私は太陽があるの所でないと力を発揮出来ない、故に女王陛下が私に授けて下さったものだ」

ブルムロードモンの説明に驚きを隠せないバハルス帝国側。今、彼はこう言ったのだ。

— 私達の女王は、天候を操る能力すら授ける事が出来る、と—

驚きで硬直していると銃士隊が椅子やテーブルを出し、もてなしの気持ちを見せる。

「ただいま女王陛下及び、お嬢様は準備に時間が掛かっております。申し訳ございませんがこちらでお寛ぎながらお待ち下さいませ。飲み物やお茶菓子を御用意させて頂きました」

1人の銃士がジルクニフへ頭を下げながら声をかける。ジルクニフはその厚意を受け、椅子に腰を下ろす。

「見た事が無い菓子だな。これは?」

「今回御用意させて頂いた物は、女王陛下のお気に入りの1つ。『もみじ饅頭』を御用意させて頂きました。お飲み物は『緑茶』を」

ジルクニフは説明を聞き、ほお。と興味を持ち『もみじ饅頭』なる菓子を口に運び、食べる。

— なんだ、この菓子は?!外の生地はしっかりと焼かれているのに中はふんわりとした食感。中には今まで食べた事が無い甘さが口の中に広がる!そして、この茶も一緒に出てきたと言う事は必ず意味がある・・・!このお茶のほろ苦さと、もみじ饅頭なる物の甘みが相互に引き立ち味わいがより一層の深くなる!そしてお茶のお陰で口の中を元に戻す事によりもみじ饅頭なる物の甘さをしつこくない物にしている!—

共に来た方々も「なんと美味しい菓子なのでしょう!」「こいつはう

めえ！」「美味しい・・・お茶も落ち着きます」等、高評価の感想を述べる。そしてバハルス帝国の方々が食べ終えたと同時にトゥーレは告げる。

「皆様、お待たせ致しました。女王陛下の準備が整いましたので、此方へどうぞ」

トゥーレの先導によりメガコロニーの根元、門の前へ案内されるが、ジルクニフ達は歩みが少し遅かった。理由は門の左右に居る超大型の虫型の魔物だ。それに気付いたマルティナは笑顔で対応する。

「ああ。皆さん大丈夫だよ、この子達は無闇に他種族を襲ったりしない。危害を加えたり攻撃の意思、つまり殺意等を向けなければ触る事が出来るよ」

マルティナは慣れた手つきでアクティオンの目元の外殻を撫でると、心地良いのか心做しか撫でられて嬉しそうに見える。反対のギラファにはトゥーレが撫でている。

「では、皆様。中へどうぞ」

牡丹銃士の後を歩く形で歩を進めるジルクニフ達。玉座の間を中心にいく少しの距離で既にバハルス帝国の貴族、自分すら持っている物を目視し、思考を巡らせるジルクニフ。

—金銭、地位、権力、軍事力に魔法技術、そして美女。フツ、私が持っているどんな財でもダークフェイス・グレドローの心を動かす事は出来ないだろう。玉座に座っているのは・・・人間？彼女がこのメガコロニーの女王だと言うのか!? 仮にそうだとしたら、既に人間を辞めている可能性が高いな。その証拠に彼女の周りの者は、人間に形が近い者は多いが純粹な人間は居ない様に見える・・・此方の勝利条件は『帝国が外されず生きて帰る』と言った所か—

「女王陛下。バハルス帝国皇帝、ジルクニフ・ルーン・フォーロード・エルニクス。お目通りがしたいとの事です」

玉座に座る女性のすぐ隣、白い花を纏った女性が女王陛下へ告げる。

「よく来たのお。バハルス帝国皇帝、ジルクニフ・ルーン・フォーロード・エルニクスよ。妾がこのメガコロニーの主、百害女王ダーク

フェイス・グレドローラじゃ」

「歓迎を心より感謝する、ダークフェイス・グレドローラ殿」

「うむ。話をする前にー」

「貴様！人間如きが陛下と対等に話をするなど不敬の極み！陛下の御前であるぞ、『ひれ伏せ』！」

グレドローラが何か言い終えるより先にダークフェイスが先に動き、スキルを使用してしまった。

威圧怪人ダークフェイス：メガコロニーの中でも上位の実力者であり、その中でも唯一『ダークフェイス』の名を冠した子・・・のだが、グレドローラを崇拜し過ぎる傾向にありグレドローラが指示する前に行動し、咎められている。

「ダークフェイス、やめよ」

「は、ハッ！光栄に思え人間、『自由にしろ』」

グレドローラから怒りの波動を感じたダークフェイスは指示通りジルクニフ達への圧を解く。

「妾の子供が失礼した。子の罪は妾の罪、許して貰えぬだろうか？お主が望むのであれば妾は頭を下げて構わぬ」

グレドローラのセリフに周囲の子供と思われる者達が驚きの表情をしている。

「いや、謝罪の必要は無いグレドローラ殿。そもそも大罪を犯したのは我々なのだ、この程度何ともない。それと、私の事はジルクニフで結構だ」

「そう言ってくれると妾も助かる。そも今回の件はお主等の誠意を見せて欲しかっただけ。そしてお主等は誠意を見せた・・・『個人的』にはこれで良いのだが、『女王』としては、そうはいかぬ」

言い終えると雰囲気さがらりと変わり、眼の鋭さが増したかのようにジルクニフは感じた。

「そうじゃ、話を進める前に1つ確認せねばならぬ事があつた。ジルクニフよ、妾の『この姿』での謁見を望むか？それとも『本来の姿』の妾と望むか？」

グレドローラはいたずらっ子の様な笑みを浮かべながらジルクニフ

へ問う。その笑みを見て悪寒が走った。

「そ、それはどういう意味なのかな？」

「そのままの意味じゃ。お主も気付いてはおるとは思いますが、このメガコロニーの主が、この子らの母が、人間な訳あるまい？それと、一応言うておくが『本来の姿』を選んでも選ばなくてもこれからの話には何にも関係しない。妾だけ姿を隠すのはフェアではないからの」

「なるほど、グレドローラ殿なりの優しさ。と言う事でしたか・・・では、『本来の姿』をお願い出来ますかな？」

「良からう・・・その眼に刻むが良い。メガコロニーの女王の姿を」

言い終えると同時に淡い緑の光がグレドローラを包み込む。あまりの光の強さにジルクニフ達は目を瞑る・手で隠す等で光が収まるのを待った。少しして、光が収まったのを確認しグレドローラの方を向くとそこには・・・正に『昆虫種の女王』が、そこに居た。

## 第16話 百害女王と鮮血帝2

「これが妾の本来の姿じゃ……ほお？幾人かは気絶すると思うておうたが、中々肝が据わっておるようじゃな」

何処からともなく扇子を取り出し口元を隠しふふ、と笑みを零すグレドーラ。そしてパチン、と扇子を畳み本題へ移る。

「さて、では本題へ参ろうか。ジルクニフ殿を此処へ招いた理由、それは……ジルクニフよ、妾と同盟を組まぬか？」

グレドーラの言葉に頭が追い付かないジルクニフ。

「……同盟？従属ではなく、か？」

「くく、愉快的顔をするではないか。妾が従属を要求するとも思っ  
ておったか？」

「……正直に言おう、その通りだ。絶対的強者、圧倒的優位の立場の貴女が何故同盟を？」

「至極当然の疑問ね。でも、私は――」

「逆に問う。『絶対的強者』『圧倒的優位』の者は、必ず支配せねばいかぬのか？」

「何……？」

ジルクニフは何を言っているんだ、と言いたげな表情をしていた。「確かにお主の言いたい事は理解する。じゃが妾は他種族を支配する事に興味は無い。妾が望むもの……それは、『子供の幸福』。その一点につきる」

「子供の、幸福……？」

「その通り。そもそもこのメガコロニーは妾の魔力で広さを変えられるから土地欲も無く、資源に困っている訳でも無い。まあ、他国の料理や菓子。民芸品にはそそられる物があるがな」

整った顎に手を添え隠す事無く晒すグレドーラに驚きを隠せないジルクニフ。

「……つまり、メガコロニーが害されなければ何処にも干渉するつもりは無い、と？では我がバハルス帝国に干渉したのは？」

「先話した通り料理や菓子、民芸品。その他諸々の情報収集じゃ。」

まあ、それ故に厄介な事になってしまったがな」

「なるほど、その言葉を信じるとしよう。では何故同盟を？ 貴女程の強者であれば、同盟など必要ないだろう。しかも同盟相手が貴女達に比べて非力な人間を」

—ふふ、良いね良いね。初めの緊張感が無くなって遠慮が無くなってきた—

「そうじゃのお。幾つか理由はあるが、妾は『支配』に興味は無いが『共存』にはとても興味がある。現状メガコロニー内で他種族と共存していると言えはしておるが、大きな争いが無いのは皆妾の子供だからじゃ。故に妾の干渉外の者と手を取ってみたいのじゃ・・・まあ、お主からしたら夢物語に聞こえるかもしれぬがな」

「他種族との共存・・・それが貴女の望みなのですか？」

「現状は、な？ 少しずつではあるが計画も進めておる。転移門<sup>ゲイト</sup>・・・さあ、参れ」

グレドローラは話終えると左手を左前方へ向け魔法を唱える。いきなり魔法を唱えた事により護衛のバジウツド達がジルクニフの前へ出て武器を構える。

—前もって伝えておいたのよね、転移門が現れたら入ってくるようになって—

門から最初に現れたのは・・・クーデリカとウレイリカ、続いてフォーサイト4人。双子はグレドローラを見つけると笑顔になり足元へ駆け寄る。

「お母さ〜ん！」

「・・・来たよ、母様」

「っ!? アルシエ！」

「陛下、来ましたよ・・・って、ゲ！ 鮮血帝じゃねえか!？」

「貴様らは、フォーサイト！」

グレドローラの脚にくっつき頭をあげる双子。元師匠を目視するも落ち着きグレドローラの元へと歩み寄るアルシエ。転移門が現れたら入ってくれ、としか言われてなかったから、入った先に鮮血帝が居て驚きを隠せなかったヘツケラン。そしてフォーサイト登場にこちら



も驚きを隠せないジルクニフ。

「ふふ、来たか。よしよし」

グレドローラは屈むと双子の頭を優しく撫で、撫でられた双子は嬉しそうに撫でられる。

「陛下はこの通り、人間の娘を既に養女として迎え入れ愛情を注いでおります。無論私達もこの子達を可愛い妹として接しております」

グレドローラの隣に控えている白い花を纏う女性がジルクニフへ笑顔で説明をする。

「それに、これだけではない。アルシエ、自己紹介を」

「はい、母様」

グレドローラの声がけによりアルシエは魔力を解放し『今のアルシエの姿』を帝国へ晒す。蜘蛛人としての自分を。

「初めまして、皆様。私は百害イビルファイリア姫アルシエ・ダークフェイスと申します。以後お見知り置きを」

軽く腕を広げながら自己紹介をするアルシエ。そしてアルシエを見て1歩、また1歩と歩みを始めるフルーダ。

「アルシエ、そ、その力を・・・是非私にも・・・！」

3歩目を踏んだ瞬間、足元に銃弾が着弾し衝撃が発生する。その攻撃に「ヒッ」と怯み尻もちをつく。天井を見上げると、一部が歪んでおり、そこから撃つてきたもの分かる。そしてそこからゆつくりと少女が現れ降りてくる。

「誰の許可を得て私達の妹に近付いておりますの？そして、その気色の悪い視線をやめて下さらない？」

アルシエの後ろに降り立ち、ぎゅつと優しく抱き締めながらフルーダへ圧をかけるナイトメア。

「こ、これは失礼した。爺は魔法の事になると我を忘れてしまうのだ」「ふふ、構わぬよ。どうやら知り合いのようじゃな？知り合いの者がいきなり蜘蛛人になっておつたら取り乱ししよう」

何も知らぬ様に語るグレドローラに、こうなる事を分かっていただろうにと苦虫を噛み潰したような表情になるジルクニフ。

「アルシエのこの姿は、アルシエ自身が望んだ事じゃ。母として、女王

として、娘の意思を尊重し力を与えた。フォーサイトは現状のまま、妻の子らと鍛錬を行なっておる」

双子の頭を撫でながらフォーサイトへ手を向け説明を行なう。

「ジルクニフよ、これを見てもまだ妾の望む『共存』に疑いを持つか？」  
ジルクニフはグレドローラの問いに対し、改めてフォーサイトの面々を見る。

「確かに、彼等が洗脳されているとは思えない。むしろ生き生きとしているようにさえ見える……仮に同盟を断ったとしても恐らく我々の記憶を消す程度にだとは思いますが、断るのはグレドローラ殿達に恐怖しか感じない低俗のする事――

「いや、疑いは晴れた。清々しい程に」

グレドローラから見たジルクニフは、何やら吹っ切れた様な顔に見えた。

「そうかそうか。それは良かった……して、返答は如何に？」

「貴殿の提案、喜んで受けさせてもらおう」

「ふふ、それは何よりじゃ。これからよろしく頼むぞ、ジルクニフよ」  
グレドローラはジルクニフの元へ歩みながら人の姿に戻り手を差し伸べる。そして、その手を取るジルクニフ。

「こちらこそ、末永く頼みたい」

こうして、バハルス帝国とメガコロニーによる同盟が成立した。

「今日は同盟成立した良い日じゃ、メガコロニーで宴を開こうではないか」

「折角の申し出だが、全てメガコロニー側に負担させる訳には……」  
握手をし終え、グレドローラが宴を提案するもジルクニフは帝国側が何もしないという事に引目を感じていた。それに対しグレドローラは笑顔で対応する。

「気にせずとも良い、妾がしたいだけじゃ」

くく、と扇子を取り出し口元を隠しながら微笑むグレドローラ。

「宴は明日行なう。セシリア、ジルクニフ達を客人用の館へ案内せよ」

「畏まりましたわ、陛下。それでは皆様、私について来て下さい」

セシリアは転移門<sup>ゲート</sup>を唱え、ジルクニフ達を先導する。そして玉座の

間にグレドローラ達だけが残った。

「ふう・・・子供達よ、各階層から呼び寄せてすまなかつたの。これにて解散じゃ。先程話した通り明日は宴じゃ、楽しみにしておれ」

グレドローラの言葉と共に守護者達は自分の階層へ戻って行った。そして残ったグレドローラ、フォーサイト、双子、牡丹姉妹、ナイトメア。

「それはそうとアルシエ、あの老いぼれはどういう関係でしたのよ？」  
まだ抱きついていたナイトメアはアルシエの頬をツンツンしながら問い掛ける。

「あう。私が学院に通っていた時の師匠です、ナイトメア姉様」  
「なるほど。それで此処に来た時少し動揺していたのね？」

今度はトゥーレが反対の頬を優しく撫でる。そして少し頬を染めるアルシエ。

「か、母様から転移門ゲートが現れたら来るようにとしか言われてなかったからですつ。トゥーレ姉様！」

「まあ、元師匠に加え皇帝までいたし。動揺は仕方ないと言えるね。それとアルシエ、私達に・・・というか、そろそろ敬語禁止。もう私達は姉妹、家族なんだから」

マルティナが正面から顎クイをし、アルシエにトドメを刺した。

「ま、マルティナ姉様・・・っ／＼／＼」

美女、美形、イケメン美女に囲まれたアルシエは顔をお湯が沸くのではないかと思う程真っ赤に染まっていた。

「あんた達にはまだ早いから見ちやダメよ」

双子の目を手で隠すイミーナに、どう声をかけて良いか分からないヘッケランとロバーデイク。

「全く、元気なことじゃ」

仲の良い子供達を玉座に座りながら眺め笑みを零すグレドローラだった。